

宮崎縣史蹟調查報告

第三冊

宮崎縣史蹟調査報告（第三冊）

例　　言

一。大正四年三月『宮崎縣西都原古墳調査報告』第一冊を、大正六年三月、其の第二冊を印行す。斯く西都原古墳の文字を用ひたるは、調査の地域の西都原に限られ、調査の対象の古墳に限られたるに由る。而して今回改めて『宮崎縣史蹟調査報告』と題せるは、其の地域及び対象の稍々擴張せられたるを以て也。

一。調査は其の時と所と人を異にせるが爲、報告の形式同じからず。其の意見も悉くは一致するものに非ず。這是報告として止むを得ざるの事に屬す。其の排列は、調査の後先に従りて順次したり。

一。報告は、入手後、多少の日子を経れば、此の報告に於ての主張は、必ずしも報告者の現在の主張と等しからざるものあらむも、科學は駆々の勢を以て進む昨の是は今の非なるもの多し。寔に止むを得ざる也。而して、今一々之が補訂を請ふの暇なきを以て、報告受理の年月を附載し、其の主張の時を示しぬ。

內容一班

日向古墳調査報告(天正二年五月)

東京帝國大學理科大學講師

鳥居龍藏氏

西都原史蹟研究所出張概報(天正三年八月)

京都帝國大學文科大學教授

理學博士小川琢治氏

西都原古墳調査報告(天正四年七月)

東京帝國大學文科大學講師

原田淑人氏

西都原古墳調査報告(天正五年一月)

東京帝國大學理科大學講師

柴田常惠氏

京都帝國大學文科大學教授

文學博士内藤虎次郎氏

京都帝國大學文科大學助教授

今西龍氏

記事索引

日向古墳調査報告……………『鳥居龍藏』……………(一)

〔大正二年五月報告〕

旅行の概要(一)

▲高千穂を中心として(一) ▲無數の横穴の存在(二) ▲北韓瀋淵と同種に屬するもの(一) ▲延岡を中心として(一) 原始的山城の遺跡(一) ▲美々津高鍋を経て宮崎に(一) ▲有名ある齋殿原(二) ▲奈良朝時代に於ける日向の中心地(二) ▲都満神社、都農神社(二)

第一。有史以前の遺跡遺物(三)

▲土著の先住民(三) ▲海津見の一族の割據(三) ▲土蜘蛛の一族(四) ▲石斧、石鎌(四) ▲日向獨特のものに非ずして(四) ▲彼等は未だ農業を知らず(五) ▲當時の海岸若くば河岸(五) ▲漁撈・狩獵(五) ▲石錐類る多く(五) ▲全國中他に類例を見ざる所(五) ▲南方村の貝塚(六) ▲人肉を食せりしカニバリズム(六) ▲モールス氏の大森貝塚篇(七) ▲打製石斧、磨製石斧(七) ▲新石器時代の石斧(八) ▲石庖丁(八) ▲チクチ、エスキモー(八) ▲滿蒙朝鮮の石庖丁(八) ▲石鎌(八) ▲南滿洲朝鮮のものと同一(九) ▲オモリ石(九) ▲四み石(九) ▲土器(九) ▲民族的色彩(十) ▲肥後の貝塚土器(二) ▲網目模様の形跡(二) ▲土器作りのオモリ(二) ▲石器時代の曲玉(二) ▲吾祖先と何等かの關係(二) ▲チャシ(二)

第二。原始時代の遺跡遺物(三)

▲ヤヨヒ式或は中間土器(三) ▲原始的唐草模様等あし(三) ▲何等か宗教上の意味(三) ▲古墳時代に近接する傾向(四) ▲日向に於ける最古の民族(四)

第三。有史時代の遺跡遺物(五)

▲古墳は當時の大博物館(五) ▲奈良朝及其以前のもの(六) ▲有石槨土壙(一六) ▲無石槨土壙(二六) ▲横穴(七) ▲チャシは古代の船址(七) ▲神籠石(八)

第四。古墳の状態と其の遺物(八)

▲南方村の銚子塚(八) ▲銚子塚の發掘(九) ▲粘土棺を形成(九) ▲竹製の檻(九) ▲曲玉の美觀(三) ▲埴輪樹物の存在せるある(三) ▲石器時代より古墳築成の間(三) ▲古墳としての最古の時代(三) ▲其死有棺無槨(三) ▲埴輪築成時代よりも遅く上代(三) ▲石棺は最初凝灰岩(三) ▲其一人は正に死者(三) ▲鏡劍は一種の魔除け(四) ▲不可思議現象(四) ▲瑪瑙石管玉(四) ▲有石棺土壙分布地帯(五) ▲飛内式の存在(五) ▲延岡附近は石棺の本場(五) ▲有石槨土壙(五) ▲可愛宮山陵(五) ▲延岡附近の横穴(三) ▲日向古墳の形式(八) ▲川南の古墳群(元) ▲持田の古墳群(元) ▲掘り込み石棺(元) ▲高鍋の祭壇式古墳(元) ▲茶臼原の大古墳(三) ▲前方後圓式の代表物(三) ▲上穗北の有石槨土壙(三) ▲祭土原の地形(三) ▲第三號墳(三) ▲治平元年以後(三) ▲經筒は寄生蟲(三) ▲天下の銚子塚と同じく(三) ▲鏡を破りて埋む(三) ▲遺物は多く後圓の部(三) ▲本墳と陪塚との關係(三) ▲歿死者を葬りしてふ心理狀態(三) ▲各特殊司仕の心を以て(三) ▲神話傳説との暗合(三) ▲第二十二號墳(三)

▲二股の矛(三) ▲大なる一本の鎗矢(三) ▲第二十三号墳(三) ▲古墳帯を發掘(三) ▲粘土棺は大土墳に(三) ▲第一号墳(三) ▲異ありたる形式(三) ▲奈良朝時代日向の中心地帯(三) ▲第三紀層丘陵地帯(三) ▲大淀川流域(三) ▲奈古の大古墳(三) ▲遠目塚(三) ▲古墳の間に本庄の町をあせるもの(四) ▲上長塚(四) ▲幾内地方の色彩連想(四) ▲跡江の古墳(三) ▲古墳の間に本庄の町をあせるもの(四) ▲上長塚(四) ▲幾内地方の色彩連想(四) ▲砂丘の上の古墳(四) ▲横穴(四)

▲有石碑古墳を横穴に應用せり(四) ▲高千穂の横穴(四) ▲其の遺物(四)

第五。山城の遺跡(三)

▲高千穂四皇子峰の如き(四) ▲うだのたかきに(四) ▲高鍋城址(四) ▲富田村鬼付女(四) ▲都於郡村高屋城(四) ▲黒貫寺の地基(四) ▲原始的形式を帯びたる(四) ▲大陸より此處に分布し來れるもの(四) 遊るを得ず(四)

第六。結論(四)

▲天孫派と中間土器遺跡(四) ▲大陸の文化の影響(四) ▲日向の古墳築造の時代(四) ▲漢代以前に

西都原史蹟研究所出張概報…………『小川琢治』…………(四)

〔大正三年八月〕

一、調査員發著(四)

▲島田貞彦(四) ▲今西龍(四) ▲梅原末治(四) ▲神浦萬十郎(四) ▲内田寛一(四) ▲寺田貞次(四)

二、調査作業日誌(四)

▲國分寺遺址(四〇) ▲史蹟研究所開所式(四一) ▲茶臼原方面調査(四二) ▲都於郡下三財平郡方面調査(四三)
 ▲西都原第四號塚及び第〇號塚(四四) ▲高鍋方面の古墳群(四五)

三、遺跡調査概報（四五）

▲新田村の古墳群(五六) ▲千畠の横穴式石室(五七) ▲池の城址(五八) ▲こやね塚と其の附近の古墳群(五九)
 ▲都於郡の諸遺蹟(五〇) ▲龜塚と其の北方の古墳群(五一) ▲中の別府の古墳群(五二) ▲井上の丸塚(五三)
 ▲松本の船塚(五四) ▲西の別府の古墳群(五五) ▲持田坂本の古墳群(五六) ▲はかり塚と石船塚(五七) ▲石
 棺の底部に水抜き穴(五八)

四、古墳發掘報告（五九）

▲第四號塚發掘(五六) ▲第〇號塚(五七)

西都原古墳調査報告（五四）

柴原
田
當
人

▲第六十號塚の發掘(原田淑人(五八)) ▲矛、劍、玉、鏡、鐵、壺(五九) ▲第五圓錐鐵質大(五九) ▲陪塚第一。第五十
 五號(五六) ▲陪塚第二(五六) ▲第六十六號塚原田。柴田常惠(五六) ▲第二十號塚(柴田常惠(五六)) ▲第二十
 號塚(五六) ▲發見位置の圖

西都原古墳調査報告

(大正五年一月報告)

一、調査日誌（五六）

今内
藤虎次郎

龍

▲第二號古墳(六) ▲幅十尺の石築物(六) ▲粘土櫛(六) ▲多數の小玉、良玉、管玉(六) ▲木片の間
に漢式鏡一面(六)

二。調査記(六)

▲第二號塚の位置と外形(六) ▲姫塚一本塚第二號塚の比較(六) ▲地方名柄鏡塚(六) ▲隣接塚の經筒
(六) ▲内部の構造(六) ▲前方部の調査(六) ▲後圓部の構造(六) ▲土壤の作成(六) ▲土壇面に礫
石を葺く(六) ▲棺を置く(六) ▲粘土櫛を作る(六) ▲堆石を以て蔽護する(六) ▲堆石外の築造物(六)
▲封土を加ふ(七) ▲棺及遺物の配列に就て(七) ▲發見の遺物(七) ▲銅鏡(六) ▲はびろんに發行せ
るZedde(六) ▲木片(充) ▲勾玉(充) ▲管玉(六) ▲小玉(充) ▲刀子(七) ▲第二號塚の性質(七)
▲第十一號塚、第二十一號塚との比較(七) ▲後圓部に粘土櫛(七) ▲意義不明の石築物(七) ▲棺櫛擁
護の堆石(七) ▲過去の土俗學(七)

圖版索引

- 圖版第一 (五四頁。第一圖。西都原第六十號塚。原田)
圖版第二 (五五頁。第三圖。同。
圖版第三 (五五頁。第四圖。同。
圖版第四 (五七頁。第六圖。同第五十五號塚。同)
圖版第五 (五九頁。第一圖。同第二十號塚。柴田)
圖版第六 (六四頁。第二圖。同第二號塚。内藤。今西)

- 圖版第七………(六三頁。六五頁。第一圖。同平面及斷面。同)
- 圖版第八………(六五頁。六六頁。第三圖。同後圓部梯縱斷面。同)
- 圖版第九………(六五頁。六六頁。第四圖。同梯橫斷面。同)
- 圖版第十………(六五頁。六六頁。第七圖。同後圓部梯基底の土壤。同)
- 圖版第十二………(六六頁。第五圖。同。同)
- 圖版第十三………(六六頁。第六圖。同。同)
- 圖版第十一………(六六頁。六七頁。六八頁。第八圖同梯堆石外の築造物。第九圖同梯右側
面内部。第十圖同棺坐上遺物配列。)
- 圖版第十四………(六八頁。第十四圖。大和。河内?古墳出土。同)
- 圖版第十五………(六八頁。第十三圖。尾張國。不二村。同)
- 圖版第十六………(六八頁。第十一圖。西都原第二號墳。同)
- 圖版第十七………(六九頁。第十五圖。第二號墳。同)
- 圖版第十八………(六九頁。第十六圖。同)
- 圖版第十九………(六九頁。第十七圖。同。同)

圖版 (第二) 水稻田



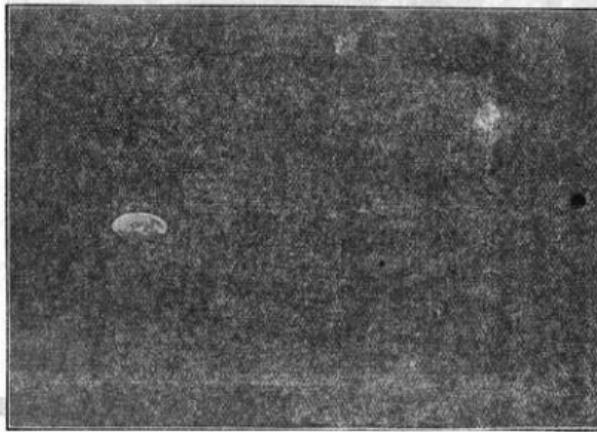
圖版 (第1) 水稻田

〔頁五五〕 (二 第) 版 圖



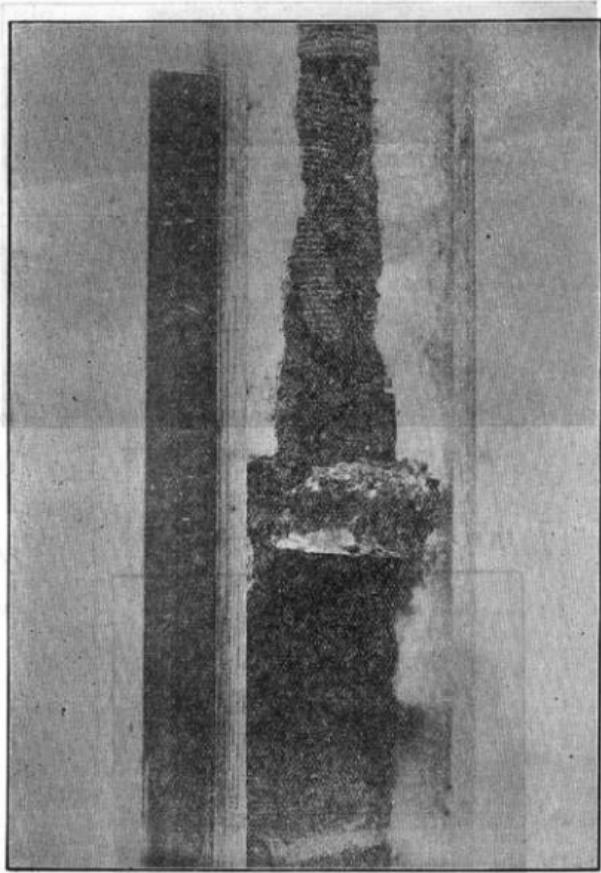
(人 旗 田 原 墳 号十六第原都四) 圖三 第

〔頁五五〕 (三 第) 版 圖



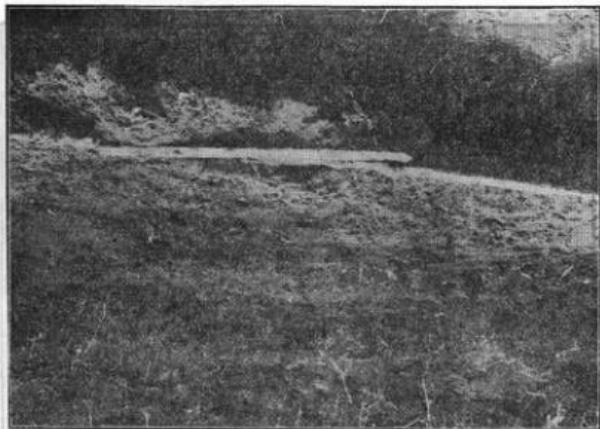
(人 旗 田 原 墳 号十六第原都四) 圖四 第

圖五 (橫正) 二六四



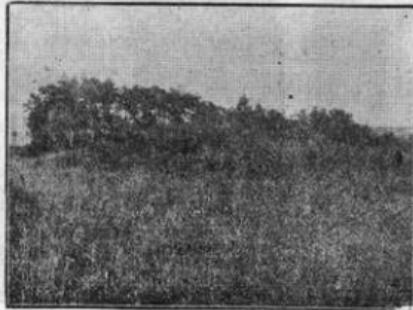
圖五 (橫正) 二六四

〔頁九五〕 (五 第) 版 圖

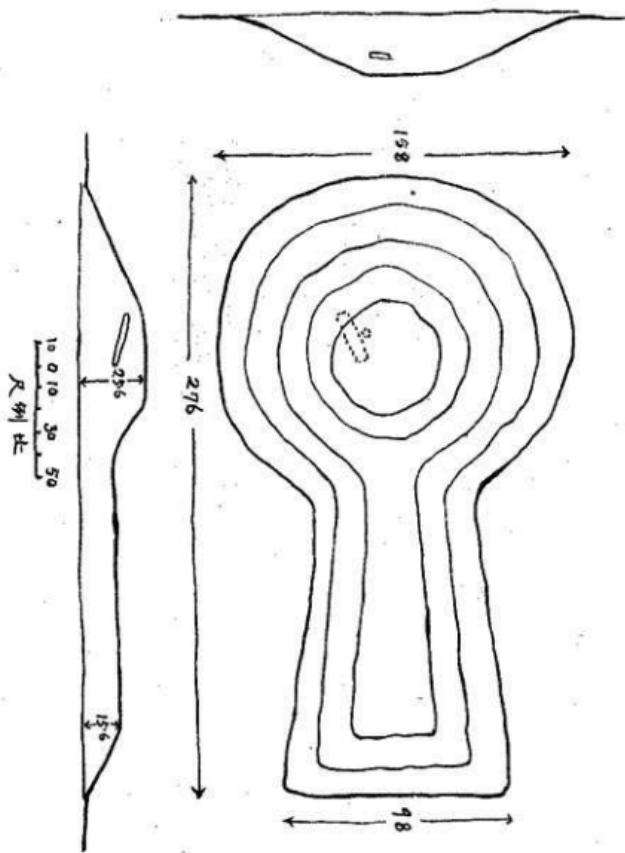


(基 常 田 柴 墓 號十二第京都四) 圖一第

〔頁四六〕 (六 第) 版 圖



圖一 (龍四个自信虎墓內 墓號二第京都四) 圖二第

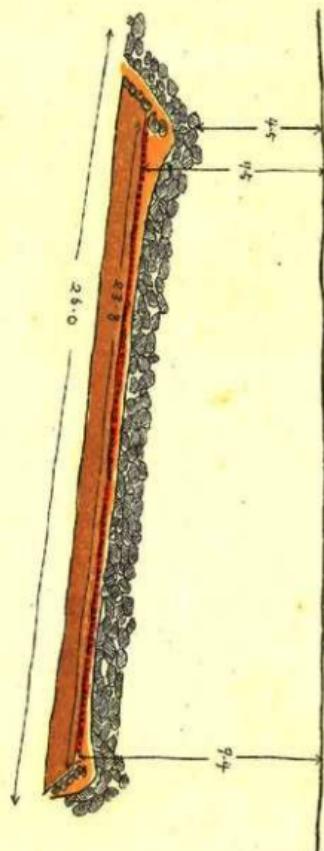


(西漢長沙王內城北城垣之剖面圖)

第一圖 第二子古墳平面及斷面圖

圖版(第十一)「西漢長沙王」

(此两个胆囊内壁膜二层原都同)

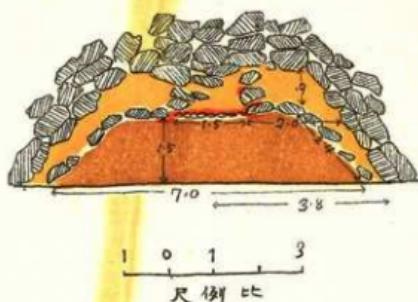


圖四、膽囊壁之橫切面

圖四、膽囊壁之橫切面

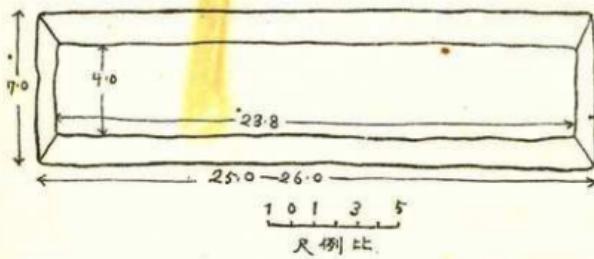
〔頁六六、頁五六〕（九第）版圖
 （龍四今。那次虎羅內 墳號二第 原部西）

第四圖、
 横断面圖、



墳土、底基部分內後 圖七第

〔頁七六、頁五六〕（十第）版圖

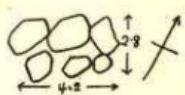


（龍四今。那次虎羅內 墳號二第 原部西）

〔頁七六、頁六六、頁五六〕 (一十第) 版 圖

(龍四今 邪次虎羅內 墳號二第 原都四)

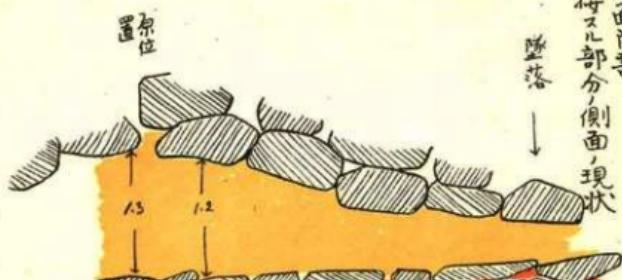
第八圖.



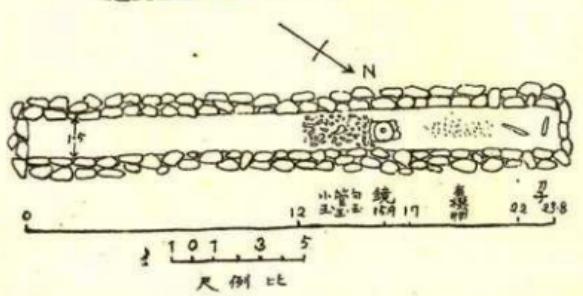
櫛堆石外築造物

第九圖. 櫛右側面頂部
前側接瓦部分側面現狀

墜落 ↓



第十圖.



圖一四《第十四》(大英圖書館
〔頁七六。頁六六〕(二十第) 版 圖



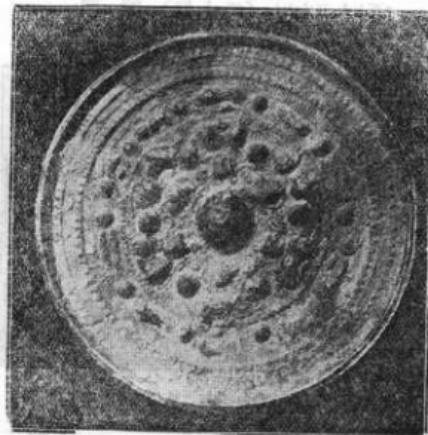
(龍四今。那次虎蘿內 墳號二第 原都西) 圖五第

〔頁七六。頁五六〕(三十第) 版 圖



(龍四今。那次虎蘿內 墳號二第 原都西) 圖六第

『貢八六』(四十第) 版 圖



(大河内。和大) 圖四十第。

圖 版 (第十五) 「六八頁」



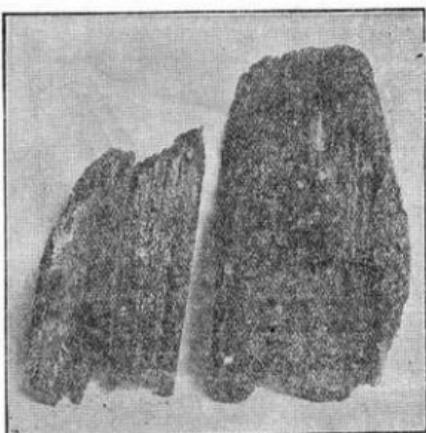
(大河内。和大) 圖三十第。

『實八六』(六十第) 版圖一〇四



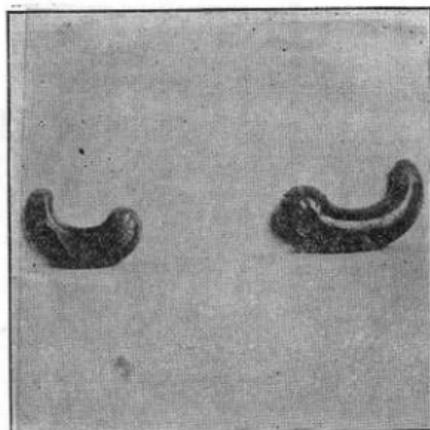
《龍四今》那次虎羅內 墳號二第原部西 圖一〇第

圖版(第十七)「六九頁」



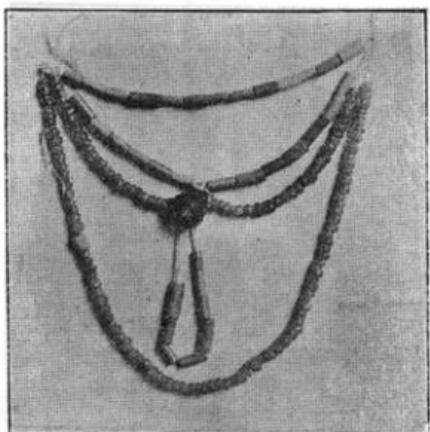
《龍四今》那次皮羅內 墳號二第原部西 圖五十一

〔頁九六〕（八十第）版圖



〔龍四今。那次虎蘿內 墳號二第原都西〕圖六十第

圖版（第十九）「六九頁」



〔龍四今。那次虎蘿內 墳號二第原都西〕圖七十第

圖版（第十九）「六九頁」

宮崎縣史蹟調査報告 第三

日向古墳調査報告 大正二年五月

旅行の概要

予は、第二回の史料調査たる諸洲及平安北道の旅行を終了し、大正二年三月四日を以て宮城に到着するや、數日にして時に東都に歸らんとするに方りて、日向に於ける古墳を調査する事とはなれり。うは有吉宮跡、鶴知事より朝鮮總督を經て予に此調査を頼託し來れりしか以て、諸君其委託を請うに決し佐藤和清氏を補助として帶同することゝせり。

乃ち三月十六日を以て宮城を離し、翌日門前に上陸後更に文藝府に向て出發す。而して太宰府を中心として調査すること二日にして熊本に向へり。熊本に着すれば既に宮崎並びに半の前進者として餘者記田村正一氏の出張せるあり。此に於てか遂に阿蘇山麓に取り、山脚舞地に於ける習俗也も太古の風あるが如き純朴の文化に興じし、終に宮崎縣西日野郡に入り、高千穂、「に三田井」とも稱すを中心として所期の調査を開始せり。

押も高千穂の地たる、四面山を以て圓み延闊を経て日向灘に注ぐ五箇瀬川の上流に在り。此處には無数の横穴墓在せるを以て之が研究として最も注意すべき地點たるなり。此を以て先づ此等の横穴の發掘と破壊は之より出でたる遺物に就きて調査する所あり。尙ほ、高千穂の東に位せる岩戸村に於けるものかも發掘せり。要するに此附近一帯は横穴を以て充満せり云ふも致て不可なき状態なるが、却て土壘を以てせる古墳等は「もの」を認むる體はざるなり。而して高千穂に於ては古代の原始的山城たる所(チャシ)の遺跡在りし、其形式北緯及諸洲地方に於けるものと同様に屬するもの在りしは、之が比較研究に對して予の感興を惹起するに極まりださるものたり。

由来高千穂は山間僻険の地たるにも拘らず、最も古代より人の住居せしものたるは、横穴以前の人の手に成りし遺跡、遺物たる石器、石斧其他の器類の各處に存在せることにも知らる。予は是より南郷川に沿ふて下るに、沿岸原始的山城の遺跡とも見られぬ地形の名なる認めつゝ、既に登る。即ち數日に亘り此處を中心として更に其附近の調査せしが石器時代の遺跡たる遺跡も存在し、又は古墳古穴等をも見たり。殊に石棺の多く存在するは此附近の特色にして、其他山城の形式を有する遺跡を見たり。去つて海岸を走り、美々津に出で高鐵を經て宮崎に到着せり。宮崎に於ては有吉知事及び他の鶴知事

に會して圓柵に屬する當種の打合せを爲し、是より更に槇土原に赴き、次で見瀬郡妻町に向へり。

妻町は、有名な「鷲殿原」（に鷲土原）の古墳群在する地にして、唯大正元年未より二年の初頭に亘りて彼の東西兩大塚并に宮内省等の諸氏が古墳を發掘したるは即ち此地たるなり。予し亦た是より槇土原を調査するとなつて二週間の日数を費して或は古墳を發掘し、或は其外形を比較し、或は既出の遺物に就きて研究を遂げたり。此地は奈良朝時代に於ける日向の中心地にして國府及國守の如きも此處に存在したるのみならず延喜式内社たる都萬神社の跡地であるありて尙ほ有所謂御陵地に當めり。而して古墳は實に數百の多さに達して其形式亦た種々あり、彼の氣行天鳥の行宮西たりし高塚の遺跡を初め古代の城邑たる館庭の存在するもの甚だ多く且つ有史以前の遺跡頗る豐富なり。予は具に之が觀測調査を了して再び高塚に入れり。

在鍋原町も亦た古墳及山城の遺跡豐富にして、其形式甚多なり。俗稱「ノ宮なる延喜式内社都萬神社を奉して藏する所の古物を調査し、延岡

に到る」。妻町に於ては、貞潔を期め大古墳一箇と小古墳二箇を發掘せしが、尙ほ外に石棺及石碑を有する古墳跡からず。是より再び宮崎に入り更に南方、鰐江、高瀬等大淀川流域の遺跡に從事せしが、該流域は古墳の分布地帶にして大古墳の存在するもの頗る多く、尙ほ槇木及石器時代の遺跡に富むを見たり。

日向は、古來耕作の地として、はた上代歎の地として人口に増長し、人跡も我國の上吉に趨りて其史實を追憶すれば、必ずや日向の地を想起せざるもの無けん。然らば今此古國日向は人種學上及考古學上如何なる事實の存在せらるんか、予は今師の調査に於ては主として此見地に於て注意すべき所ありたり。由て今左に之が記述を試みんとする。

予の日向に就て新學の上に調査したる事項を記述すれば第一、有史以前の遺跡遺物（古墳鐵造時代）に類別するを得べし。

器の出づる遺跡、第三、有史時代の遺跡遺物（所謂舊生式土

第一 有史以前の遺跡遺物

日向は我祖先と最も關係深き地にして天孫派の傳説は主として此附近より發す。吾人の傳承せる神話に由れば、天孫瓊々杵尊此地に降臨し給ひ、次で彦火々出見尊、鷦鷯草薺不合尊を経て、稚御毛沼尊即ち神武天皇の御代に至りて天業を東方に恢弘し、邊土強継の世となりしものにして、天孫派は即ち日向の地を以て我祖先の發祥地と目せるあり。然れども我祖先が此地に降臨せる時は既に土著の先住民の在るありて、決して無人の境にあらざりしことは、瓊々杵尊の降臨を以て、國津神たる大山祇之神の女木華開耶姫を寄れて后妃とおし給ひしに見るも、尙ほ且つ其附近には海津見の一族の創據せるありて、此等より類推を下すも土著先住民の存在せし事實明かるのみあらず、日向風土記に由れば土蜘蛛の一族も亦た早く此附近に住せしより。されば天孫降臨の神話傳説を認る遼遠ある歴史上の事實と假定するも、其以前に住せし國津神及土蜘蛛の此處に來りたる時代を以て尙一層古きものと見做さるを得ざるを得ざる可し。即ち吾人は我上古に於ける神話傳説に依りて此事實を推斷するを得るある可し。

此に於てか神話傳説より日向を假定すれば略ば如上の推斷を下すを得れども、之を直に考古學上の事實に照して確實に證明され得るか否かは注意を要する問題ならん。若し此考古學上の事實にして明かに證明し得たらんには彼の神話傳説は一層の光彩を放つを知らん。而して天孫降臨の當時を考古學上より調査するこの既に至難に屬するのみならず、尙其以前を知るの困難あるや論かし。然るに此點に關しては、我最古の傳説も何等の語り傳ふる所あきを以てすれば、果して今日の科學が之に對して研究的効果を挙げ得るか否かは疑問に屬するものと云ふ可し。

今考古學を大別して前史考古學及有史考古學とすれば、日向に於ける如上の研究は全く前史考古學の範囲に屬するものにして、必ずや此研究法に依りて決せざるべからず。而して現今の斯學は或程度迄は進歩發達せるを以て此困難ある問題に向ても亦た或程度迄は思索考證を圖らすを得べし。而かも此時代は既に有史時代にあらずして信憑すべき傳説すらも存せざるを以て唯だ當時の彼等が棄て行きたる遺跡、遺物に就きて研究を遠ぐるの外はあらず。予は即ち前史考古學の研究法に依りて此等の遺跡遺物に向つて調査を遂げたり。然るに幸にも此等の材料は續々現出し來りしかば、聊か當時の事實に就きて其一班を知るを得たり。

日向には海岸線に接近せる地方及大河の河畔又は山間の邊地に至るまで石斧、石鎌の類を見出しえ得べし。抑も此等は如何ある民族の手に成りしかば我祖先と種々の點に於て大に其性質を異にし、一も類似關係する所を見出さず。此點に於ては此等の遺物を留めたる民族は我祖先と異なる民族の手に成りしものたるを信せんと欲す。而して此等の遺跡遺物は其土中に埋没包含せる狀態及其遺跡遺物の種類等より比較するに我祖先よりも尙一層古きものにして、渺くとも我祖先以前に移住し來りたる者の遺棄したる事を推知し得るあり。今若し此等の民族に對して假りに神話傳説上より命名するどせんか、彼の土蜘蛛の如き最も適當すべきものあらん。

抑も此等の遺跡遺物は日向一國の特有物あるか、果た之が九州全體のものと關係を有するか、或は更に日本全國のものと類似せるかは先づ第一に注意すべきことたるあり。然るに此等日向に残存せる前史時代の遺物は決して日向獨特のものにあらずして、其齊國たる肥後有明灣方面のものとも甚しく相酷似し、如何ある専門家と雖も、此二國の遺物を混淆せば、恐らく其鑑別に苦むや必せり。然らば是れ皆に肥後一國のものに比してのみ限られたる類似あるかと云ふに、尙此等の遺物は九州全島より四國、中國、幾内、東北地方まで

も分布し、更に南は大島群島より沖縄群島に達せり。果して然らば日向に於ける有史以前の事實は我全國に於ける有史以前の事實と類似せるものにして、即ち其民族、年代共に略類似せるを推知するを得ん。斯く考へ来らば日向の天孫降臨以前に住居したる土著民族は復た我全國にも汎く分布したるを知るに難からず。且向に於ける有史以前の民族に就ては予は略ば以上の如く思料せるが、却て彼等の當時に於ける生活狀態及文化の程度は如何あるものありしか、抑も彼等は未だ農業を知らず、又た其日用使用する利器の如きも未だ金屬器の使用を知らずして、何れも石を以て利器とせりき。即ち文化史上の昔を以て云へば、彼等は明に石器時代の民族にして、當時に於ける彼等の生活は其遺跡遺物に徵して考ふるに或者は山上山麓に、或者は河畔海濱に住居せしもあり。而して此に注意すべきは當時の海岸若くは河岸と稱するも、地理は常に變化しつゝあるものあるが故に昔時の海岸線は既に桑田と變じ、又河畔に於ても其流域の變化堆積の關係によりて狀態の相違を來せるものあり、以て其時代の如何に久遠に屬するかを推知すべきものある可し。未だ農業を營みざる彼等は其生活として漁獵、又は狩獵を事とせりき。即ち海岸線及河畔に住居せるものは漁業に從事し山部に住居せるものは渓谷の小魚を漁り、或は主として鳥獸の狩獵に從事し、海濱に漁業を主とせし者は其食物として魚介を採取せしものならん。加之當時の海岸線に沿へる丘陵上に於ける其等民族の遺棄したる貝塚を發掘せば啻に貝類のみあらず魚類鳥獸の骨をも見出し得べし。即ち之に依て見れば海濱に住したる者も亦た傍ら狩獵を事とせしらん。而して彼等の盛んに漁業を營みし事は到る處の遺跡に於て網の「オモリ」^{オモリ}石頑る多く、吾人は步行しつゝ之を採集するも忽にして兩袖を満すを得べし。斯くの如く「オモリ」石の多く存在せるは我全國中他に類例を見ざる所あれば此地が如何に漁業の盛りしかを知るに足らん。尚ほ山間の遺跡を検するも頗る遺物に富み殊に石錐の如き最も多く存在せるを見る。是れ狩獵の盛りしが共

に亦兵戦に使用せしことを知り得るあり。而して石器を見て彼等の兵戦に使用せしことを思ひ出すと同時に館
跡の如き遺跡の多く存在せるこ事はあり。該遺跡は我國の北部より北海道、樺太及北朝鮮、滿洲等に存在する原
始的山城にして、此等遺跡は兵戦に際して敵を防禦するが爲に用ひし山城たりしや論あく、以て當時の民族
が如何に戦闘を事させしかを知るべきあり。

以上の如く彼等の生活状態は天然に食物を仰ぐべく漁獵を事とし、石器を以て利器させしものにして、渺
くとも天孫降臨前に於ける日向在住の民族は斯の如き状態の下に在りしあり。而して尙ほ此等の状態に關し
詳説する所わらんとする。

當時彼等の食物は鳥獸魚貝本質草根の類を採りしものあらんも、茲に彼等が人肉を食ひし特種の事實を認
むべきものあるあり。而して此事實は予の今回日向延岡附近ある南方村の貝塚を調査せし結果に見ても尙且
指摘するを得るものあり。即ち此貝塚より發掘したる人骨は大腿骨にして、其両端は打割られるのみか
らず外面に於て石斧を以て削られたる痕跡を留むるより見れば、是れ人肉を食用に供したる一大事實を語る
ものにして、當時其之を食するに方り鏃に投じて熟煮するの際便宜上大腿骨の兩端を適當に打割りたるものと
見るべく、又外面の削られたる箇處は食事に際して石斧を以て其肉を削り落したる後更に此大腿骨を以て何
等かの器物に利用せんとして削りたるものあるべく、即ち此等の事實は一面に於て彼等が所謂食人種ありし
事を證するに足らん。

抑も我石器時代の民族が人肉を食せりし「カニ・パリズム」なりし事は彼のモールヌ氏が既に業に神奈川縣
荏原郡大森貝塚に於て夙に此事實を發見し、之を氏が世に公にしたる『大森貝塚篇』中に論述したるは斯界に
重きをあしたる顯著の事實ありしが、其後日本全國に於ける各所の貝塚に於ても此事實は事實として著々證

明せられ、爲めに當時の民族は所謂食人種ありし事實も亦た否定すべからざる事に屬す。

モールス氏は該論文中大森貝塚の事實と共に尙ほ肥後大野村の貝塚よりも此人骨を得し事を記載せるが、其後今日に至るまで我九州の地に於て他に此事實を發見したる報告に接するを得ざりしが、今回端あくも延岡附近ある南方貝塚に於て此事實を知るを得たるは彼の大野村の貝塚の事實と共に一の新事實を發見したものにして、以て九州に住居したる石器時代の民族の食人種たりし事を推知するに好適の資料たるを失はず。

石斧 當時彼等の利器として生活上一日も缺ぐべからざるものは此石斧にして、彼等は此石斧を以て魚介鳥獸の肉を調理し、或は物を斬り割りかどしたるものにして最も必要缺ぐべからざる日用品ありしより。今此石斧を分類して二と三とを得べし。一は磨製石斧にして二は打製石斧もあり。

磨製石斧は石をすり磨きて斧の形に製作したるものにして、日向に於ては此種類のもの頗る多く存在し就中優秀美觀を呈せる石質のものすらあるを以て見れば、當時此等の石斧中各自己の所有に屬する貴重品のありますしを知らる。而して此等石斧の製作法は其遺物に由りて之を見るに最初格合好き石を海岸或は溪流等より採集し來りて之を表裏の兩面よりすり切りつゝ磨き上げたるものにして精巧勞力の多大ありしを知らる。若し其の使用に際し過て刃を損するが如き場合には一種の砥石を以て更に之を利したるものにして、猶ほ今日の鐵斧の刃を砥石にて磨すると同様ありしより。而して第二の打製石斧は全く石を粗雑に割りて石斧の形を造りたるものにして、其製作前者に比較すれば最も簡易粗雑あるを知らん。人若し此等二種の石斧を見て直に新古の別を云ふせんとするあらんも、此等二種の石斧は常に同一場所に相應して存在するより見れば其時代も亦同一時期の製作たるや論もく、歐洲にては前者を新石器時代の石斧、後者を舊石器時代の石斧と稱

するものすらあれども、吾人は日向に於けるものが何れも新石器時代のものに屬するものあることを認むるに憚らず。

石冠丁は其形稍圓形にして普通上部に二箇の孔を穿つを例させり。其孔の下部は刃を附けられたる多少の面積を有し、適當の木片を以て此稍圓形の石器を挿み二箇の孔より紐を通して之を固定すれば、即ち此に冠丁の用を爲すものにして、此の如きは之を遠く石器時代に遡りて想像を逞しくするよりも現在に於て亞細亞大陸の北端に棲めるチクチ、亞米利加大陸の北端に棲めるエスキモー及亞米利加印度人等の間に於て使用せらるを見ば思ひ半に過さん。而してエスキモーの使用せるものに之を「ララフク」と稱し、チクチに於ては之を「ベクトル」と稱し多く婦人の腰間に佩するを以て特に「ウーマンスナイフ」と稱呼せり。則ち婦人用の小刀たるを意味するあり。日向に於けるものも亦た此種のものに屬するや論あし。

日向に發見せらるゝ石冠丁の數も亦頗る豊富にして、此種のものは骨に日向一國に限るものにはあらずして、日本全國の石器時代遺跡よりも發掘せらるゝものたるに止らず、吾人が最近數年間に亘りて浦安及朝鮮の調査を行へる結果に對し亦此等石冠丁の發見に接せるを以て比較研究上興味ある資料たるを知るあり。

石鍬も亦日向の各地より豊富に發見せらるゝものに屬す。而して此等石鍬は平時に在りては鳥獸の狩獲に用ひられ、戰時にありては其武器として敵を惱ます唯一の利器ありしる。

今日向に於けるものを見るに二種の分類を以て區別するを得べし、一は打製石鍬にして他の一は磨製石鍬たるあり。打製石鍬は普通日本の各地より出づるが如く打缺ぎて製作したものにして其形狀にして、今形の如きは僅に一個を見たるのみ。多少其形狀に於て大同小異の別はありと雖も、要するに扇形の範圍に包括し得るべきものたるを失はず。

次に磨製石鎌に屬するものは粘板岩の如き軟弱なる石材を以て製作し、其形狀復た等しく△形にして、一も△形を見す。而かも巧妙ある磨きを施せるが故に一見金屬にあらざるかを疑はしむるが如くあるも、何れも石器たるや論あきあり。而して此等發見の場所は打製磨製共に相混淆して常に同一場所に於て發見せらるゝを例させり。今日向に於て石鎌の最も豊富ありしは高千穂(三田井)の地ありしが、此地の調査に徴すれば打製百個に對する磨製約二個の割合を以て發掘するを得たり。而して此磨製石鎌の石質及形狀等は吾人が南滿洲及朝鮮等に於て得たるものと全く同一にして之を混淆すれば直に其鑑別に苦むが如き程度に屬せり。

要するに是まで日本内地に於て單に石鎌と云へば打製石鎌のみを目せるの感あきにあらざるも、實は此等磨製石鎌をも其中に混淆して仔細に之が製作に區別あることに注意を缺ぎしものにして、伊豫、信濃地方の如く比較的夙に注意せられたる地方に於ても亦た二者混淆の弊に因はれしあり。

〔オモリ石〕が漁網に附着せられしものたるや論もく既に前述せるが如く日向の石器時代遺跡に於て最も豊富あるものは即ち此『オモリ石』あるが故に日向土著氏の生活状態が多く漁撈を事とせりしを知るべく、其發見の遺跡と現状の地理に想倒せば河川の流域及海岸線の冲積等に對して異状の地理的變化ありしをも首肯し得べき資料たるを失はず。

此外石器として回石の如き、其他日用品に屬する他の石器類をも發見し得て、普通石器時代としての遺物に缺乏せざる地點たるを確め得たり。

土器 然るに當時の民族は所謂石器時代の文化的程度に過ぎざりしそ雖も尙且つ土器を造ることを心掛けしあり。而して此土器たるや純然たる素燒にして赤褐色を呈し主ある製作の種類としては壺、皿、鉢、碗等の類にして此等土器中耳即ち取手の附着したものと然ざるものとを有し、又外部の表面には一種の模様を

描出せるものあれども、而かも吾人の祖先が遺棄したる古墳品の土器とは啻に焼方に於て異なるのみならず、形狀、意匠模様等總ての點に於て全然相異せるを見る。即ち此等土器の形狀及模様の如きは其民族の何者ありしかを知るに於て最も有力ある材料にして、之に依て當時に於ける彼等の文化及其性質を窮知するに難からず。

抑も、石器時代の土器の如きは其形體に於て何れの民族と雖も、互に類似共通せるが故に、其特徴を發見するに甚だ苦む所あり。例せば石鎌の如き其製作の意思目的餘りに簡單にして、餘技を弄するの必要なく、單に目的物に命中致命傷を與ふるにありてふ思想は、其形體に於ても期せずして東西相一致する所はある。又石斧の如きも此意味に於て大同小異多くの特技を試むる餘地を存せず其目的と製作との範圍が常によく於ても類似共通して何等の特徴を見出す能はざるあり。されば石器の形體に於ては其民族的關係を見出すべく頗る苦む所あるに反し、土器に於ては決して然らざるあり。

土器は石器に比して其目的用途稍複雑あるが故に茲に初めて民族的色彩を表はすに於て然かく極限されたるものにあらず。彼等の文化的程度に於て特技を發揮し得るの餘地自らに存するあり。彼等は其思ふが儘に其形狀を造り、其思ふが儘に其意匠を凝らし、其思ふが儘に其模様を附するを得る。斯くて製作せられたる土器には其等民族の固有ある精神狀態を漂はして、所謂此に民族的色彩を表白するに最も好都合の作物たるを失はざるあり。故に一度び此等作物たる土器に接觸すれば吾人は直に其體形に於ても其輪廓に於ても、其意匠に於ても、其模様に於ても、優に其民族性を看取するを得べく、隨て當時の民族が如何ある狀態にありしかをも推考し得るの資材たるなり。

今此見地に於て日向の土器を見るに、壺の如きあり、鉢の如きあり。皿の如きありと雖も、而かも此等の

土器は總ての點に於て全然古墳より出づるものと其性質を異にせるのみならず、或物は一種の耳即ち取手を附著し、或物は其土器面に朱を塗抹せるものありて、模様は溝狀を呈して所謂唐津模様の初步に屬したるものにして、我祖先が試みし如き幾何學的模様とは大に其性質を異にせるを見る。尙此種の模様は彼のアイヌの如きオロツコの如きギリヤークの如き、其他黒龍江方面に於けるツングース民族の模様に比して酷似せるものあるを見たり。而かも此日向に於ける土器の形狀、意匠、模様等は昔に日向獨特のものにはあらずして、他の日本各地に於ける石器時代の土器と共通にして、殊に肥後の貝塚より發見せし土器と對比せば最も酷似せるを知らん。而して此等の土器面には模様を描出せる外に於て網を壓し付けたる所謂網目模様の形跡を留むるが故に、當時使用せし網が如何ある編万ありしかをも推知し得るに難からず。

此外土器作りの『オモリ』をも見たるが、これは彼の『オモリ石』と同一意味に使用せられたるものにして、網に附著して漁網、狩網共に之を用ひしや明けし。

曲玉 我石器時代よりして、玉石其他の石材を用ひて頭飾を製作したるは確かに事實なりしに相違無かる可く、其形狀も亦種々ありしが、就中我祖先が用ひたると同一形式ある曲玉の存在せし事も亦事實あるが如し。吾人は此種の曲玉を稱して石器時代の曲玉と稱し居れり。其形式は所謂曲玉と敢て異る所あらず雖も、其製作粗雑にして通孔の刻法の如き上下両端より刻鑿して以て孔を穿てり。而して頭飾用の石材の如き主として美觀をさせる寶石若しくは類似の玉石を選擇せるが如き事實は吾祖先と何等かの脈絡關係あるやに思はしむるに足るものあり。即ち吾人の祖先は此等先住民の使用せしものを模範したるものあるか、或は又反對に彼等が我祖先のものを摸擬したるあるかは、最も注意すべき點だるなり。而かも此真相に至りては現在の研究程度に於ては一箇の疑問に屬して、未だ的確ある判断を下す能はざるを遺憾とせざる能はず。而して日向の石

器時代の遺跡よりも亦此種の曲玉を發掘するを得るより見れば、我古國日向の地に於ても亦其先住民の曲玉を使用せりし事實は最も興味ある問題たるあり。

館趾(チャシ)

石器時代の遺跡が主として昔時の海岸及河畔の丘陵上に存在することは既に前述せる所あるも、尙其他の遺跡として注意すべきものは當時の館趾の各所に存在することを看過すべからず。是れ北海道及樺太地方に現生せるアイヌは此等の遺跡を目して特に「チャシ」と稱し居れり。こは丘陵の先端に壕を設けたるものにして、蓋には河流の存在せる形勝の位置を探へり。即ち此に占據して以て互に各部族の敵對行為を防禦したる陣地の遺跡たるあり。斯る遺跡は予が最近の調査に依れば北朝鮮及滿洲地方にも存在せるを見る。果して然らば此等石器時代に於て「チャシ」を設くる風習は北方大陸に於ても一般に行はれたりしものあらんか。而して我内地に於ては多く岩代以北の地に於て認められ、北海道及樺太に至りては其分布特に顯著あるものあり。然るに予は今回日向を調査したる結果に徴するに、同地方に於ても尙此「チャシ」の遺跡の各所に存在せるを見たり。而かも此等は其地方に於て最も高き丘陵乃至は山を應用し、其麓には必ず河流の走れる形勝の地たらざるはなく、此山或は丘陵には必ず二段乃至三段の壕を設けるをも見たり。此等の地點よりは石築、石斧の類を發掘するを得るあり。こは或意味より云へば所謂山城の原始的形式のものに屬し、彼の北朝鮮及滿洲地方に存在せるものと最も能く相類似せるを見る。

子の日向に於て認めたる此種の形式中最も顯著あるものは五箇瀬川の上流に位置せる高千穂（三田井）を起點として其流域の各所に於て認めたる此種形式の山若くは丘陵を以て「チャシ」の遺跡たるを指摘せんとする。即ち斯くも日向に於て原始的山城の石器時代に存在せる一事は斯學上最も注意すべきものたるあり。要するに、日向に於ける有史以前の民族の狀態は以上の如くにして之に由て考ふれば我祖先が未だ日向の地

に臨まざるの以前に於て一種の土蕃の棲息したる形跡をトするに足るのみならず、此等民族は我國の各地に存在せる遺跡を留めたるものと同一民族にして、互に共通せる關係の存せるものたるや自明の事に屬するあり。

第二 原始時代の遺跡遺物

有史以前に於ける日向には我祖先と何等の關係かき土蕃の遺跡の存在せることを述べしが、尙之に次ぎて更に注意すべき遺跡遺物の存せるものあり。そは如何なるものに屬せるかと云へば、石器時代のものとは全く關係を失くして一種特別のものと見做さるべからざる理由を有す。

此遺物に就きて最も注意すべきは、其土器にして、爾來斯界に於て彌生式或は中間土器の稱呼を有し内地の各地より發見せらるゝものあるが、其形體は壺、高杯、皿、甕等の類にして、燒方は事ろ石器時代のものよりも粗雑あるのみならず、其形式、意匠も亦た撰を異にし、模様の如き主として幾何學的のものを用ひ、一も石器時代のものに見るが如き原始的唐草模様等の存する多く、尙此土器の模様の輪廓中には最も小さき布目若くは網目を印し、且つ朱を以て外面を塗抹せるものもあり。而して其存在場所よりは多く完全あるものを發掘し得られ、彼の破損物勝る石器時代土器の比にあらずして、互に並列して埋没せるかの如き傾向を有す。左れば此等土器の存在場所は當時何等か宗教上の意味を含有せるにはあらずやとの疑問を生ぜしむるあり。

前述の如く、石器時代の土器に比して、其形體、燒方、模様、存在の狀態等に於て相違の點多く、一も連絡する所あきより見れば、此土器を使用せし民族は彼の石器時代の民族とは自ら別種のものにして、石器時

代より此時代に推移し来る過渡時代のものとも見るべき連絡すらも見出すを得ず。然らば我日本民族の遺したる古墳横穴等より發掘せらるる土器に比して多少の連絡を見出すべしを檢するに、是亦た相違の點歟からず。例へば其模様の輪廓中に布目及絹目を印しゐるが如きは絶対に我祖先の土器に見出し能はざる所なるのみあらず、其他模様面に別種の土を以てイボの如きものを添加し以て一種の裝飾を施せるが如きも之を我古代土器に見出す能はざるあり。左れば此等諸種の點より考ふるも古墳築造時代に於ける我祖先とは何等の交渉かく大に其性質を異にせるものと見るの妥當あるを信す。然れども仔細に之が比較研究を遂ぐれば唯だ我古墳土器中に於ける埴輪に就て其模様の幾何學的ある點に於て多少の連絡を見、尚ほ高杯の如き二者共に之を存せるのみならず此等が一種宗教上の儀式に供せられたる狀態より見れば此に多少の連絡を我古墳時代のものに見出し得るの點あきにしもあらずと云ふを得べく、即ち換言すれば其類似關係の度は石器時代よりも其距離に於て稍古墳時代に近接せるの傾向を有するものと見るを得べし。此に於てか此土器を使用せし民族は石器時代の民族とは何等の關係を有する全く別種のものと見るを得べけれども、我古墳時代の民族とは互に連絡を有せしものと假定するを得るあり。斯く考へ來らば此等の遺物は古墳築造時代よりも更に一層古に遡りたる時代にして、渺くとも日向に於ける最古民族も亦此民族ありと云ふを得べし。吾人は我民族が如何なる人種に屬するかを極言するあくして、單に之をX民族として考ふれば、日向に於ける我最古の祖先は、寧ろ古墳築造時代の遺物を残し行きたるものにあらずして其以前のものと云ふの當れるに如かざるなきかを想はずんばあらず。若し天孫族あるものが最古の日向民族なりとせば此等中間土器即彌生式土器を發見する遺跡並に此遺物を以て之に當て兼めざるを得ざる結果を生ずるあり。彼の古墳時代の如きに至りては其土器は尙埴部土器を用ゆと雖も、其殆ど總ては既に遠く陶の名ありて所謂現代語の祝部土器を用ゆるを見

る。而かも此祝部土器の焼方は最も堅牢にして既に進歩發達し不完全ながらも橈輪を使用せるさへありて其色亦鼠色を呈せるを見れば、其製作法は既に大陸の影響を受けたるものと思料するを得べし。加之此等古墳時代に於ては既に鏡あり硝子玉ありて、其時代は略ば此等によりてすらも決するを得るあるべし。然るに此遺跡遺物は一層遠遠のものにして、爾來古國日向を研究せんと欲する者の多くは昔に古墳其者にのみ注意を傾倒して其以前に於ける我祖先の遺物に就きて注意を拂ふこの點は予の最も遺憾とする所あり。若し此等の遺跡遺物にして我祖先のものありせば、日向の地は最も古きものにして、古墳築造時代以前既に業に我最古祖先の居住せりし事を主唱し得るは當然の結果ありと云ふを得べし。

第三 有史時代の遺跡遺物

予は既に原始日本民族の遺跡遺物に就きて略説する所ありたるが當時の我祖先は土壇を築き又は山腹に横穴を設けて墳墓と爲すが如き風習の認むべきものあく其文化的程度も亦頗る幼稚ありしあり。然るに有史時代に入りては文化大に進み隨て其埋葬に際しても土壇を築き又は横穴を設けて墳墓と爲すが如き程度にまで進歩せるに至れりしを見る。考古學上の見地よりすれば此時代に於ける文化の中心代表と見るべきは、一に此古墳の存在あるが故に特に古墳時代として當時を表徵するを適當すべし。

素より此等古墳は當時の人を埋葬せし一箇の墳墓たるに過ぎざるが故に單に其時代の風習に關する一小部分を示すに過ぎずと雖も、此等古墳には常に當時の人を埋葬したるのみならず、復た隨て當時の衣服、裝身具、其他日用諸器具及武器等に至るまでの諸藝術品をも埋められれば、此等古墳墓に依て各方面に於ける文化的狀態を推知するを得るあり。此點より觀察すれば古墳は當時の一大博物館とも稱すべきものにして其中に

は種々ある藝術品の陳列せらるゝが故に予は古墳研究を以て最も有意味ありと解するに躊躇せず。

既に有史時代と稱するも此等遺跡遺物は平安朝以前のものにして主として奈良朝及其以前のものに就きて述べんと欲す。而して日向には奈良朝及其以前のものに豐富にして何れも我祖先の遺棄せしものあれば古國自向の一群を窺はんには此等の事實に依りて開闢するの外あけん。今此事實を述ぶるに方りて予は大略左の事項に區別して記載せんと欲す。

一、土 墳

二、横 穴

土壙 とは内部に石棺、石槨等を埋め其上より土を覆ふて以て古墳を形成せるものは是あり。

横穴 とは山若くは丘陵の中腹に穴を穿ち之に死者を埋葬せるものは是あり。

以上の如く古墳を大別して二種ごあせども尙ほ前者たる土壤を細別すれば其形式に依て左の如く更に之を分類するを得るあり。

一、有石槨土壤

二、無石槨土壤

有石槨土壤 とは土壤の内部に石槨を築きたるものあり。

無石槨土壤 とは之を有せざるものと稱するあり。然れども此無石槨土壤中には石棺の存在せるものあれば

更に之を左の如く細別するを得べし。

A、純土墳

B、有石棺土壤

C. 有土棺土墳

日向に於ける今回の調査中有石棺土墳は僅に三ヶ所に之を見たるに過ぎずして、他は悉く無石廓土墳ありき。他の我各地に於ては上代のものとし云へば殆ど其總てが有石棺あるに反し、日向に於ける大部分が無石廓あるは大に注意を要すべき點たるを失はず。而して無石棺土墳に於て石棺の存在せるものは主として延岡地方に止まりて、他是殆ど之を見る能はざりき。而して彼の祭土原の如き古墳の數に於て最も豊富なる地あるにも拘はらず一も此地に於て有石棺のものを發見するを得ざりしが如き亦た注意すべき事實たるもの。

次に横穴に就きて云へば、横穴の分布も亦た一定の分布状態を認むるに足るるものあり。例せば、高千穂の如きは殆ど其全部が横穴のみにして、予は終に一箇だも土墳の存在せるものを認め能はざりしより。而して他に於ては土墳と横穴と相交りて存在せるを見たり。此に於てか日向上代の墳墓も其地理學的に多少の特色を有するものと見て差支あからんことを信ずるものあり。

最後に注意すべきは、爾來考古家及歴史家の上代に於ける遺跡遺物の調査に對しては、土墳及横穴を経て、次に之より出でたる遺物を緯として其研究材料を充たさんとしたる傾向あるも、予は日向を調査するに及び尚ほ此他に於ける同時代の有力ある資料を發見するを得たり。井は即ち山城の遺跡に關してあり。山城は或意味より云へば古代の館殿とも云ふべく、其形式は北朝鮮及滿洲に通じて存在せる山城の形式と同一のものにして、此等は古墳時代と同一のものにして、當時の人民は此に住し、或は此を一種の要塞として使用したるものなりと云ふを得べけん。

予の實際に觀察せし箇處に就きて記すも其數極めて多く、高千穂より五箇瀬川に沿ふて延岡に達する流域を初め、高鍋を中心としたる一ノ瀬川流域及大淀川流域に於けるが如き其分布の汎くして復た其數極めて豊

富ありき。實にや當時の我祖先が此山城を使用せりし事實は分明あるものにして、今日彼の筑前筑後等に於て發見せる所謂『神龍石』の遺跡に就きての論議の如き諸説紛々たるが一として大陸の山城の形式を帶べる意味に就きて云爲せるものなきも、日向には此等形式の山城に富めるものと云ふを得べく、予は此山城を以て古墳の研究と相俟て重要視すべきものたるを信ず。

第四 古墳の状態と其遺物

更に予の實踐せし日向各地に於ける古墳の状態を記述するに方り、便宜上之を地方分けに區分すれば、延岡、高鍋、茶臼原、祭土原、宮崎、諸縣、三田井等に分つを得べし。予は今此地方別に從て順次記する所あらんとする。

延岡附近 延岡は日向の最北隅にして五箇瀬川の河口に位置し東は一面海に臨み、西北南の三方は山を以て圍まれ自ら此に一小盆地を形成せり。由來延岡に於ける古墳の多くは其西北方に存在して、土壤横穴相交錯せるを見るも先づ土墳に就きて記せば延岡に於けるものゝ形式は其外形に依りて凡そ二種に區別するを得べし。銚子塚、丸塚即ち是あり。

銚子塚は其形所謂長柄の銚子形にして前方の土手は柄に相當し、後方の墳は酒を盛る容器に匹敵するを見る。されば之を上部より見れば柄鏡に似たるが故に又柄鏡塚と稱する者もあり、今此形式の代表物とも稱すべきは南方村字天下に於ける二大古墳にして、一は天下神社鎮座せる敷地其者にして他の一は天下神社に相對して北方に存在せるものあり。前者は既に其上に天下神社の鎮座せるありて一見丘陵の觀を呈すれども近く之に接すれば明に古墳たるを知るべく、而かも神社の鎮座せる箇所は後方圓形の部分に相當せるを知るる

らん。此古墳の外部には一面に小石を積みたる面影を見るを得べし。

今此古墳の規模の大あるより見れば其埋葬者の高貴の人たるに相違あきを知るべく、尙此塚の側に沿ふて一小丸塚の存在せるものあるを見るべし。這是既に其或部分の破壊せられありて大なる石材の表はれ出づるを見るべく、之よりして直に其有石櫛土墳あるや否かを決定する能はざるも、兎に角銚子形古墳の側に存在せるよりせば、互に關係せるものあるを思考し得べし。而して其北方に存在せる第二の銚子塚の如何あるものあるかを見るに、是れ恰も丘陵上に其の自然の地形に依て造り付けられたるかの觀を呈するものにして、其形銚子形を呈して其麓には塚の迹も残存せるを見る。然れども附近一帯には人家の點在せるを以て容易に之が全形を窺ふ能はざるも、北方より遠く之を望めば勞塚として美しき銚子形を呈せるを見る。予は此塚の發掘に從事し聊か得る所ありしが、元來此土墳は正確に東西南北に位置を占め長柄の先端は正東に面し後方圓形の部分は正面に位して天下神社に於けるが如く小石を以て其外部を覆へるを見る。先づ此塚の上部より掘り初めしが内部には石櫛の存在する全く全く土櫛頭にして其土壇の下には土棺の存在せるを發見せり。此土棺たる粘土棺は其下部に砂利を敷きて其上に土を置き又再び砂利を敷き斯る施設を重て以て粘土棺を形成せるものにして、其土棺の長さは一丈五尺、幅員は中央に於て三尺五寸、東端に於て三尺三寸、西端に於て三尺八寸あり。蓋は存在せるも上部に於ける土石の壓迫に依りて「へ」字形に落し在りたり。而して土棺は粘土にして發掘當時は灰白色を呈せしに依り之を識別するを得發掘後空氣に觸るゝに從て順次堅さを増し來れり。而して更に土棺の下には粘土の層を見其下は砂利の層又其下は再び粘土の層にして土棺の内部には朱を詰め殊に朱は東の部分に於て濃厚のものを遺しありたり。

予は此古墳に於て如何ある遺物の存せるかを検せしに東の部分には曲玉管玉の存在せるありて殊に竹製櫛

の之に附隨せるを見たり。此曲玉及管玉は當時裝身具として死者の頸に懸けられたる儘葬りたるが故に其連ねたる糸は既に消滅し盡したるも、其纏ひたる玉は正しく其儘に遺留せり。而して之に附隨せる竹櫛は其數に於て十四箇許を留め人骨は既に消滅して其形を存せざるもの想ふに此竹櫛の置かれたる箇所は死者の頭部に當れるものあらん。即ち曲玉及管玉は頸に懸けたるものにして、竹櫛は頭に刺し置いたるものあらん。而して此竹櫛の斯く多く存在せる事と玉の存在との關係より考ふれば此竹櫛は當時行はれたる結髮^{ノゾマ}美豆良に刺し置したものにして猶今日に於ける婦女子の束髪を留むるが爲めに多くの櫛を用ゆると同様ありしみ。此竹櫛の作り方を思ふに、多くの竹片を曲げ束ね糸を以て其中央部を繋縛したるものにして就中両端の竹は比較的大あるものを用ひありて上部には紙に類するが如きものを貼附しあり。這是彼の埴輪土偶の髪に簪せるものを初め古墳品中之が模造品として石を以て製作せるものもあり。尚ほ同形の竹櫛は曾て之を周防に於ける或る古墳よりも發見せる例あるのみ。あらず上代に於ける櫛が竹を以て作りし事由は既に我記^{ハシ}の神代の卷に於ても記載せるが如く伊邪那岐命が伊邪那美命を黄泉國に追ひ往きませし時伊邪那岐命は左の御美豆良に刺せる湯津々間櫛の男柱一ヶ取り開きて火を燐し以て暗黒を照し、伊邪那岐命は右の御美豆良に刺せる湯津々間櫛を引き開き給へば忽ち爭を生じ以て黄津醜女^{ハシ}の難を逃れさせし物語に徵するも、當時の櫛が竹製櫛もありしを考證するに足り、殊に此古墳より出でたる櫛の兩端比較的大ある所以のものは以て男柱に該當せるものと見る可とせんか。尙ほ斯る櫛の形式は歐洲にては彼の瑞西の水上居住の遺跡より出でし事例あるも、這は櫛の木を以て作りたるものにして二箇相連接せるを見る。若し強ひて現今最も此形式に似通ひたるものを求めんと欲せば南洋諸島に於けるものにして殊にボリネシャ群島のサモア、トンガ等の土人の使用せるものゝ如き蓋し之が好適例たるに庶幾からんか。

曲玉は三箇を發掘したるが何れも小形にして光澤あり其美觀到底出雲石の如き比にあらず。管玉は二十三個を發掘したるが是亦小形にして美觀を呈せり。予は此發掘に際し此部分に於ける朱を取除きて以て玉を探取せんとせしが思はず此に一種崇高ある靈の存在せるを感じ得しものありき。而して此中央部には向つて左方於て一尺一寸の劍と槍と平行に安置し其下部には更に左右に二個の刀を並列し其中央に小劍を横へたるのみにして他には何等の遺物を存せず人骨等の現存亦た之を認むる能はざりき。思ふに此塚に埋葬せられたる者は東を枕としたるや論あく、而かも此粘土棺は其銚子形の墳墓の中央に存在し柄の方と同位置に在り。此に於てか當時の死體の頭部は銚子形の後方に在りて其足部は柄の方に向ひしことを考へらるゝあり。此塚には外部に於て埴輪樹物等の存在せるあく前述したるが如く全く丘陵の自然形に准じて加工したものゝ如く築成せられありて古墳の底下部たる丘陵上には砂利を敷き詰め其上に土を盛りたるものなり。而して此塚の形を熟観すれば自ら三段に區割せらるゝものあり。即ち柄の方に於て一段、之に後の銚子形を加へて此に三段の形式を爲せり。予は此古墳に就きて尙ほ興味ある事實を發見したり。そは此古墳の基礎たる丘陵は始石器時代の民族の居住せりし場所にして古墳は此石器時代の遺跡の上に築かれ居る一事あり。即ち石器時代以後に於ける何程かの土が其遺跡の上を覆ひ此自然に覆土されたる上に更に古墳を築造したるものにして、予の考としては石器時代の遺物の挿まれたる包含層より此古墳築成の最下底に於ける砂利に達する迄の間は僅に五寸許の層にして即ち此五寸の距離は其年代を示せるものにして石器時代より古墳築成の間は此五寸に依りて意味せられたるものと云ふを得べく、是に依て之を見れば此古墳が石器時代と餘り遠からざる時代に於て築成せられたるものあることを思料し得るに難からず。而して此處よりは彼の硝子玉の如きのものも出づるあく、又石標もなく、周圍に埴輪樹物等をも見ざるよりすれば、此古墳が古墳としての最古の時代に屬す

るものにして面かも高貴の人の葬られし場所たるべきを想見するに難からず。今日此古墳に關する何等の傳説を有せざるも此地を天下と稱するが如きは最も注意すべき地名にして、彼の記紀及萬葉集等に散見する『天降せし、あざるが如く元此地に天より何等かの神が降臨せしかの傳説を有せしには非るか、果して然らば此等二大古墳に就きてても亦た相關連せる傳説を有せしものと見るを得ん。

次に注意すべきは既に序論中に記載せしが如く日向に於ては有石槨の土墳少くして多く無石槨のものある事にして、此處に高貴の人を葬りし銚子形の土墳も亦た無石槨ある一事あり。元來無石槨土墳は畿内、中國關東等のものより考ふれば普通のものにあらざるを思はしめ、此等一般古墳に就きてのみの智識を有する者よりすれば所謂其法則に當て嵌められざるかの如き感あらんも、予は却て興味ある事實を語るものありと云ふを憚らす。彼の後漢、三國時代に成りし魏志に依れば日本の古墳に就き記して曰く『其死有棺無槨封土作家』もあり。此棺ありて槨あしと記したるは日向古墳に於て見ると同形式のものにして、由來予は關東、畿内等の古墳地域に往來出入ることの繁きが故に此魏志の記事を以て常に解釋に苦む所ありしが、今親しく日向を調査するに及んで其事實の符合せしに想到し感興禁ず能はざるあり。而かも此古墳の大にして其内部に存在せる遺物等より見れば如何にするも決して有石槨土墳の形式を省略して石槨を用ひざりしものと思考するを得ず。加之粘土棺を設けたるが如き他地方に於て見る可からざる現象にして是れ畢竟我古國日向に於ける最古の古墳たるに相違あるべく、況んや此に埴輪樹物の存在せざるが如き渺くとも埴輪築成時代よりも遙く上代に遡りたるものたるや明かあり。

天下神社ある銚子形古墳を去る約二丁許にして互に相對せる二個の圓墳古墳あり予は此二個の圓墳をも發

掘せるが今左に其結果を記載せんと欲す。

予は先づ此二個の圓塚中西方に於けるものより發掘に着手せしが、此塚は曾て其上部に於て多少の發掘を試みしものにして其當時既に一本の直刀と一枚の古鏡とを掘り出せり、此古鏡は其形小にして優秀のものにはあらざるも所謂漢鏡たるや明あり。而して此發掘の場所は頂上より約三尺の箇所に止りしが、予は更に其以下を發掘したるに此古鏡も亦石拂無き土墳にして彼の直刀及古鏡の出し處より下ること三尺即ち頂上より六尺にして石棺に掘り當るを得たり。此石棺は最初延灰岩より成る蓋を覆ひありしも既に三箇に破損せり。此蓋は匁式にして其尖端に突起を有し北面せる部分は完全あるも南面せる部分に於て破損せるあり。予は試に此破損蓋の中央部を取り去りて検したるに匁式の蓋は最初一枚より形成せられしも上部の重量に堪はずして壓迫せられ終に破損するに至りしものと察せられたり。尙ほ悉く其蓋を取除きて検するに下の石棺其者は四個の石材を以て△形に組み合せられ其底部にも亦た數枚の石材を敷き詰め居れり。又最初は朱を以て詰めしものと覺しく石棺の内部に其附著せるを見たり。而して内部の遺物は北西の一隅に於て一枚の齒を認め其下方に於て縫に形を認め得る程度に於ける下肢骨を認め得るが、之を取上げば忽ち形を逸したる程あり。思ふに是れ一人の死者枕を北にし足を南にしたりしを知るべく、棺の中央には剣刀二本、小刀子の如きもの二本を並べ西側の縫には其北隅に矢殻を東にし在りて其下方に人骨の下肢らしきものを認めたり。彼の矢殻は蓋し之を枕としたるものあらんか。而して前尾體と相對せしめ其中央には彼の剣刀を安置しあるあり。思ふに是れ棺中の人二人にして其一人は正に殉死者にはあらざる無きか。蓋し矢殻を枕したる者の方は男子にして、他の一人者は女子ありあらん。

以上の事實に基きて考ふるに此塚は土墳の下部に石棺を安置し更に其上部に劍鏡等を安置せるは當時何等

か宗教上の儀式の存在せりしを意味せるものと覺しく其上部に在る鏡劍は一種の魔除けの意味に於て用ひられしものにはあらざるか。彼の鑿きに發掘せし上部の遺物の存在せし状態か如何ありしかは當時子の參會せざりしを以て之を詳知するを得ざるを遺憾とするあり。尙ほ此事實よりすれば上部に遺物を發掘せし場合多くは最早遺物は是迄ありとして棄てゝ之を題みざりしも此經驗に於て更に下部を發掘す可き大教訓を得たるあり。

予は更に東方の圓塚に向て發掘を試みたるが、此處は上部にては何物の存在をも認めざりしが、頂上より同じく約六尺にして複た一の石棺に會せり。而して之にも亦蓋を有せしが甚しく壓迫せられありて殆ど押しつぶされん計りありしが、其形式は前と同じくして裏側に於て『』式に掘り回められたり。仍て蓋を取りて檢するに石棺は依然石材の組合せにして其底には四枚の石材を以て正しく敷詰めありて蓋にも亦た同じく朱を詰めたるものと覺しく石棺の内部には各所に朱の附着せるを見たり。而して人骨は最早消失して認むるに由あかりしも、西方の上部に於て南京玉の硝子玉小玉無數に存在せりしは頸飾りとして舞ひしに相違なかるべく、即ち硝子玉の存在場所を以て其の頭部の位置をも推知せらるゝあり。硝子玉の色彩は略ぼ之を三種に識別するを得たり。即ち一は淺緑、一は深緑、三は淺紫色にして尙此頸飾りの下部には刀劍矛矢等の存在せるを見るが、刀の刃の部分に一箇の硝子玉の小あるが附着せり。而して此塚には不思議にも刀に接近して曲玉管玉の存在せるを見たるのみあらず一方に於て硝子小玉のみの斯くも多數あるを認めたるは絶対不可思議の現象にして、殊に曲玉は唯一箇のみに止りしも美しき大曲玉なりしのみあらず、管玉に至りては其數箇三に過ぎざりしも三箇とも瑪瑙石を以て製作したるものにして由來此種の管玉は珍中の珍品にても最も注意すべき價値を有するあり。

以上二箇の土壙が相對的に接近せるよりすれば彼此互に關係脈絡の存せしや勿論あるべく殊に石棺の形式は相似的あるも其埋葬法に於て聊か差別あるを見るあり。即ち西方の土壙にては刀劍矛矢等の如き武器を以て埋葬されるに對し東方のものは武器に加ふるに尙ほ曲玉、硝子小玉等の類を以てせるあり。而して此附近には昔時石棺を有せし土壙の無數に存在せりと覺しく、今尙石棺のみの各所に露出存在せるを見るあり。此を以て見れば山険天下の丘陵は右石棺土壙の分布地帯と見て支障あきを知るあり。

今此天下の丘陵を少しく距て五箇瀬川を渡り野田村の丘陵に達すれば北處にも亦一箇の石棺の存在せるを見たり。這是畿内地方に存在せるものと全く同一形式にして蓋と共に各同一石材を掘り込んだるものにして石質は等しく凝灰岩ありしあり。而して此石棺は非常に大なるものにして隨て其重積も亦著しく重きが爲め依然として原位置を保ちつゝあるが内部には既に遺物の存するものと石棺の一部面は破損せられて其附近に散亂せるを見たり。此石棺の特徴とする所は上部より見れば恰も龜が西本の手足を出したるかの如き形にして蓋には左右二箇宛の突起ありて此形式は畿内地方に於けるものと全く同一に屬し日向に於て斯く畿内式の存在せるを見るこも亦注意すべき事たるあり。而して此突出したる丘陵の中央部に於て原位置を保ちつゝある状態よりすれば單に石棺の露出状態が原形あるかを思はしむるあきにあらずと雖も、昔時は此石棺を覆ふに土壙を以てしたるものあるや想像するに難からず。若し此石棺を覆ふ土壙のありたるものとすれば、其丘陵の大きさより比較するも著しく宏大なるものたりしるべし。而して此丘陵の前面に於て樹木發育たる森を見たるが、これは俗に地蔵森と稱し居れども森の形式は純然たる古墳にして所帶土鏡四式のものにして未發掘のものたり。今此地蔵森の古墳が露呈石棺を有する丘陵と相對峙せるよりすれば是亦互に關係せるや論あく若し此未發掘ある地蔵森の古墳に手を下せば必ずや其内部には石棺を見出す可き性質のものたるを信す

もあり。

尙天下及野田村附近には石棺の露出せるもの多く其數實に十餘個を算する由あるも、予は終に實踐するの時間を有せざりしあり。而かも斯る石棺は彼の古墳の一大群を爲せる祭主原附近、宮崎を中心とする地點及東諸縣等何れも古墳の分布地帶たるに相違なきも未だ斯る如く有石棺土墳の存在せる事實を認めざるよりすれば、此延岡附近は實に石棺の本場と稱するも不可あきを知らん。而かも斯く石棺が單に此地方にのみ限らず他地方に存せざる事は日向に於ける考古學上最も研究に値するものと云ふべく、由來延岡附近に於て此種の石材を得る事に於て極めて豊富あるの事實を以て直に此特種事由に充當せしは餘りに輕薄の感あきにあらず。例せば予の既に記したる銚子形の二大土墳の如きは其規模より云ふも、はた其遺物の存在狀態よりするも其墳中には必ずや石棺を有するを以て至當とすべき性質のものあるに拘はらず、此處には幾に粘土棺を以て之に充てたるにあらずや。尠くとも予の日向に於ける實査の結果に徴すれば大七墳の内部には多く粘土棺の存在せるを以て一般的あるを知れり。此事實に徴すれば石棺存在の有無は必ずしも石材の豐弱に關係せるものにあらざるを信せんと欲す。即ち此事實は日向に於ける考古學上研究に値するを同時に延岡に於ける考古學上特に注意すべきものたるを知るあり。而して最後に此粘土棺を有せる土墳と石棺を有せる土墳とは其性質上埋葬者の身分の相違より來りたるものあるか。はた年代の相違より來りたるものあるか。二者其何れに屬するかの斷定に對しては未だ容易に之が判定を下す能はざるあり。

[有石櫛土墳] 有石櫛土墳は延岡附近ある大賀村に在り。此古墳は其外部及内部の或部分は既に破壊せられ居れども尚能く石櫛の構造を認むるを得るあり。今横よりして此内部に入るに二室より成りて前室は天井低く地平線との間三尺四寸許にして、後室は其高さ約前室の二倍にして六尺三寸五分あり。石材の粗方は最も巧

妙を極め石槨の壁の破壊せざる様楔形に組み合せあり。

此古墳も義に發掘せられしが尙遺物の存するものあり、其最近發掘せし遺物を見るに鐵、刀、土器の類ありて鐵は鏃矢の一種とも見る可き大あるものあり。土器は所謂祝部土器にして椀の種類に屬す。而して石槨に用ひたる石は大なる石材を用ひ、其石の面は一種の轍を以て正しく削り以て平坦あらしめあり。今其削り口より察すれば雖は幅一寸許の鐵器を使用したるものと覺しく、此塚は石槨の上に覆土したるものにして外部よりすれば一見間違ひ異なる。此處よりも曾て劍を發掘したりと云ふを以てすれば前の有石棺土墳の事實と似通ひたる點もあれど、此有石槨の土壇中には石棺の存在せりし形迹の微すべきものと此形式のものが果して彼の有石槨及有粘土棺のものと同時代あるか否かも未だ容易に斷言し能はざるも、此種のものは今日にては日向を除く外殆ど日本全國に亘りて分布せるものにして、日向に於ては却て全國普通の形式のものゝ乏しきを覺ゆるを見るに拘はらず本縣に於て此種のものゝ尙一個存在せるものあるは考古學上大切ある資料たりと云はざる可からず。

更に北川村字長井に可愛宮山陵と稱する候補地のある在り。此古墳は今既に宮内省所轄であり其周囲には竹垣を圍らし、而して長さ九間、幅七間、高さ二間の古墳あるが、其形恰も卵形を呈し正しく位置を東西南北に占め橋圓の方に於て東西に面し今や形式に於て全く卵形を呈せるも、原形は圓環ありしに相違ある可く此附近には最近迄は人家點在せしも一度山陵の候補地に選定せらるゝや全く取拂はれたるものあるが、古墳の斯く卵形を呈せる所以は曾て附近の住民に依りて長き時代の間に削り去られたるものと見るを至當ありとせん、今此塚の内部の如何あるかは予は之が發掘を試みざりしを以て斷言するを憚るも此地方に於ける諸種の事實を綜合すれば寧ろ有石槨土壇るべき性質のものにはあらずして却て有石棺土壇を見るを當れうさせ

んか。

二八

横穴 延岡には横穴の存在する處あり。就中東海村字稻葉崎に在るものに就きて説明せんに、此横穴は一方打開きたる所に面したる丘陵の横に穴を穿ちたるものにして、現今目撲し得るもの三箇を見其二箇は稍完全に原形を存せり。今其一箇に就きて云はんに其入口は縦に側伏して入るを得べく内部に於ける天井の高さは僅に二尺二寸にして其室は正四角形を爲し東西南北に位置し入口は正南に方れり。而して其右方に位せる他の一箇も亦入口狭小にして縦に側伏して入るを得べく、内部に於ける天井の高さは三尺八寸にして室の構造も亦正四角形にして東西南北に位置し入口正南方に開けり。要するに此等の横穴は所謂横穴としては其形式最も簡單なるものにして穴の掘鑿法も亦専難あり。然れども斯る横穴に於ても其發掘したる際に於ては観部土器を見出したる事實を有するあり。

以上諸種の事實は何れも延岡地方に於けるものあるが是に由て見るに該地方に於ては種々ある形式を有する墳墓の存在せるを認むるものにして日向に於ける古墳の殆ど總ての形式を先方に包括したりと云ふも敢て過昔にあらざるを知らん。故に小時間を以て日向古墳の形式を知らんとする者の爲めには此地方を観察實踐するを以て最も適當ありとせん。

高鍋附近 延岡を發し南に向て海岸線を進めば數里にして美々津川の河口に達す可し。則ち之を渡りて尙南すれば自ら一大平原開闢し來りて諸處牧場の連亘せるを見ん。是れ風に上代に於て『駒あれば日向の駒、太刀あれば高麗の太刀……』と謳はれたるの地にして古來名馬產出の處たり。彼の延喜式内社として有名ある都農神社も亦此附近に鎮座せるを拜せん。而して終に高鍋に達するあり。

高鍋は大丸川流域の南岸に位し兒湯郡役所の所在地にして平瀬ありし日向の地勢も是より變化を來して丘

陵的地貌の南に向て發達するを見此等丘陵上には古墳群在せり。就中高鍋の西川南村に於ける丘陵には古墳頗る多く此地は大古墳群地あるが、是れ畢竟今に到るまで森林を以て包まれしが故に却て保存上好都合ありしからんも漸く近時開墾せらるゝに従ひ斯くは人の注意を引き來りたるものにして特に其何れも大古墳なると前方後圓式の群を爲せる事實は最も注意すべきことあり。而して此古墳の或若には埴輪の存在せるあり又銚子塙式を爲せる大古墳の周圍に於ては陪冢の存在を認め其陪冢には圓塙あり前方後圓式ありて斯る大古墳は實に類例渺々珍らしき現象と云はざる可からず。斯くも群を爲せる古墳は向研究上忽諸に附すべからざるのみあらず尙此大古墳の西北に方りて方形古墳の在るあり。此方形古墳は祭土原に於ても認め得らるゝ形式あるが其周圍二十六歩高さ約十六尺にして原二段に築造せられしを想はしむるものあり。該地方にてはイサゴの古墳と稱せり。尙川南村を去て上江村宇持田附近に至れば復父古墳の群を在せるを見る。由來此地は鬼ヶ窪と稱せるが此處にも亦前方後圓式及圓塙を有して優に一大古墳群あるを示せり。就中最も珍とすべき晉に石棺の存在せるのみあらず前方後圓式にして二段より成り其後圓の上部の中央部に一の掘込み石棺の安置されありて延岡附近に於けるが如く凝灰岩を以てし大體の形に於ては互に類似せるも棺の内部の身の中央部には孔を有し而かも棺の位置が下部に存在せずして上部に在るが如き異數の點渺々からず。

祭壇式 高鍋附近に於て一種異りたる形式の古墳を見る。予は此形式に對して祭壇式古墳の名を冠せんと欲す。這是平面圖にて殆ど松茸形を呈し前方の長さに於ては短縮されども幅に於ては比較的廣くあれども著しく後圓の方よりも低下せるが故に此に松茸形を爲せるものにして前方は後圓に對して恰も祭壇の如き狀態を呈せり。而して此古墳は丘陵上に存在せずして平地に存在せるあり。斯る形式のものは予の未だ日向の何れにも見ざる處にして斯學上特に注意すべき性質のものたるを認めたり。

又高鍋附近の海岸には第三紀層の發達せるありて此處には横穴の設けられるを見る。而して此横穴の構造は延岡附近に存在せるものゝ如く最も簡単ある形式に屬す。要するに高鍋附近の古墳は古墳分布地として最も注意すべきものたるべく、彼の祭土原の如く未だ精細ある調査を了せざるもの一度此等の古墳に向て發掘研究を試みんには必ずや日向に於ける調査上大切ある事實を發見するに相違あかる可し。故に子は此地方の古墳に對しても將來精密ある實資あらんことを希望して已まさるあり。

茶臼原附近 高鍋より西に向て進めば一大丘陵の發達せるものあるを見ん。此等の丘陵は順次發達して終に一瀬川流域に於ける穗北の丘陵となり川を距てゝ前岸祭土原の丘陵と相對時し何れも第三紀層に屬するものあるを知る可し。而して此四周は丘陵に囲まれたる地に茶臼原と稱せる一平原の存在せるを知らん。茶臼原の四周は丘陵の最發達せる所にして遠く之を望めば恰も山岳を見るに等しき觀を呈せるなり。

抑も茶臼原ある地名の由て起れるものは、丘陵中の平原に一個の大なる古墳存在し其形恰も茶臼形をあせるを以て斯くは命名せられたるものにして、此古墳は所謂茶臼原平原中に獨立し雄大なる前方後圓式たるなり。然も其前方後圓たる考古學上の好標本として見るの價値を有し中央部は圓み左右には各一個宛のイボ式突起を有して墳は自ら三段より成り其周圍には濠を掘れるのみらず其各段級には元埴輪圓筒の立て列ねありたるものと覺しく今も其形式の殘留せるものあるあり。今若し此古墳を上より見れば左右の實邊は車の輪の如き形を呈し恰も車輪を見る感あるあり。昔時にありては此四周の濠の附近に陪塚の存在せりしものと覺しく今も尚六個の小圓墳の存在せるを認むるあり。されば此古墳の如き前方後圓式の代表物としては正に其好標本たるを失はず。實に上向に於ける前方後圓式に就いて云爲せんこせば必ずや此古墳を以て之が代表物として見るを得べく。尚埴輪の存在せるより考ふれば此古墳築造時代を以て埴輪圓筒の起りし時代をも併

•••••
考ふべきものたるを信ず、

茶白原の高原を専北西に進めば上穂北に至るべし。即ち川を挟んで島之内に相對せる丘陵上に於て一個の古墳を見ん。此古墳は所謂有石槨古墳にして内部の石槨は大なる石材を以て積み重ね室は二室より成りて構造彼の延岡に於けるものゝ如く前室は低くして後室を高くせり這は既に發掘されたるものに係れるも、古墳としての價値は延岡に於ける有石槨と同じく注意すべきものたるあり。

[祭土原附近] 祭土原は大正元年末より二年の初頭に亘り東西兩大學宮内省等に於ける諸氏に依りて其古墳の發掘調査せられたる地にして、有吉知事の意も亦主として同地方に重きを致せしを以て、予は該地の調査に對しては十數日を費して實踐する所ありたり。

抑も祭土原の地形たる前方は一瀬川の水流を控へて茶白原の丘陵と相對し、此處も亦廣き第三紀の丘陵を形成し古墳は主として此丘陵上に存在せり。縣に於ても既に此地に於ける古墳所在の箇所に對し其分布の平面圖を作製し一々之に番號を附したる所謂祭土原古墳分布圖あるものを調査し得たるに見るも如何に多數の古墳の散在せるかを知るに足らん。

祭土原には其西南方に於て二個の大古墳あり。一を男狹穗塚アカホシツカとし、他の一を女狹穗塚メアカホシツカと云へるが、兩個の古墳互に相對せるものにして、俗間男狹穗塚を瓊々杵尊の山陵とし、女狹穗塚を木華間耶媛の山陵とせらるが、要するに附近に於ては最も大なるものたるあり。

今祭土原古墳の總てに就きて其形式を分類すれば之を左の四種に區別するを得べし。

第一 前方後圓塚

第二 銚子塚

第四方形塚

此等の古墳は何れも丘陵の断崖よりして奥地一面に存在し、彼の男狹穂、女狹穂の二大墳の如きは主として奥地に存在せるものあり。而して此等の古墳は何れも一時に築造せられたるものには非ずして、此間幾多の年代を経過せるや勿論ある可し。されば亦各新古の別あることを自明の理にして或は埴輪の存在せるあり。或は之を見ざるものあるあり。思ふに断崖に面せるものは古く築かれたるものにして奥地に行くに従ひ新しく築かれたるにはあらざるか、即ち最初は景色好き平地を望見する断崖方面を占領しつゝ順次奥地に向ひしものと推するを待べく、彼の埴輪を有せるものゝ如き奥地に行くに従て多きを占むる傾向は正に此間の消息を耳語せるものと云ふべきあり。即ち予は此等無数の古墳中より發掘を試みたるものに就きて其結果を記する所あらんとす。而して先づ第一に注意すべきは此等無数の古墳中に發掘の結果に於て有石塚土墳は僅に一個の「鬼の窟」^{カニノカミ}と稱するものに於て認めたるに過ぎずして、他は今日迄の事實に於て悉く無石塚土墳と云ふべきあり。

第三號塚（宮崎縣調査の西都原古墳分布圖記號に據る）

第三號塚は大ある鈎子塚にして断崖に面して存在し其断崖と塚との距離は比較的廣き面積を占有し其地形の状態よりすれば昔何等かの建物を有せしにはあらずやとの感あきにしもあらず。其の外部は小石を以て詰められしが、發掘後約三尺にして其四方に埴輪の高杯其他祭器の破片を認めしよりすれば其完全物を埋めしや論あく、尙其附近を發掘せしに忽ち陶製の經筒を見出したり。這是蓋を密閉したる體ありしが其周囲には

木炭と石を以て詰め居り其側よりして一枚の治平通寶をも發見せり。此筒は明かに經筒たるに相違なく其内部には經を藏せる筈あれども既に消失して之を見るに由あし。然らば此時代は何れの時代あるかを考證せんに、彼の經筒の附近より見出したる一枚の古鏡こそ好個の資料にして、此治平通寶たるや宋の英宗治平元年に鑄造せりしものあるが故に此經筒を埋めたる時代は勢いとも宋の治平元年以後のことたるを云ひ得る。即ち西暦一〇六四年にして我後治泉天皇康平七年藤原風雲通鑄の時に該當せるを以て勢いとも藤原氏末裔の頃に埋められたるものと見ば大差あからん。然れども此經筒を以て來た直に古墳其者の築造時代を云寫するには誤れり。經筒は後世古鏡の上に埋められたるものにして取扱者とは何等關係の關係あるべくして、斯く古墳の上に經筒を埋めたることは所謂寄生鏡の關係と見て不可きまわり。然るに頗る詳細を追行し環上より約六尺に達して此に粘土棺を發見するに會せり。此に於てか彼の經筒は後世之を埋めし筒の寄生鏡たるに過ぎずと雖も、初めに於て見出したる高杯其他埴製の土器は全く古墳築造時代のものにして此關係なる恰も延岡に於て有石棺土壙を發掘せし事皆と符合せるを見るあり。即ち其下部に於て發掘したる粘土棺は形狀彼の延岡天下に於ける弟子塚の事實と同じく長方形の粘土棺にして其蓋は等しく此も亦破損して内部に落下降せるが爲め一見船形の如き觀を呈せり。或は此粘土棺を船形棺と稱する亦敢ひきにあらざるあり。今此蓋を取除けば長方形の棺形を露出し其周圍には小石を以て敷き詰めるを見る。而して棺は正しく南北に位置し砂利を敷きたるのみあらず、又朱の附着せるをも見たり。而して棺の内部には一本の直刀と一本の小刀を並列し其側に曲玉二箇管玉二箇を存し、曲玉及管玉は何れも美濃鏡にして彼の天下のものと類似せるを見る。又棺の外部ある東北隅には一面の鏡の安置せらるゝを見たり。述は渡鏡にして模様面を上にし其鏡面を地上に伏せて之に木片を當てがひありたり。今此鏡に就きて注意すべき事實は最初此鏡が埋めらるゝ時よ

りして故意にあされたるが如く四等分せられたる破鏡の儘に存在することにして偶然の破鏡と見做されざる状態を呈せり。由來古鏡の墳墓内にあるものは多く完全あるものあれども、之に反して殊更に破鏡せるものを埋めたるの例は實に稀有の事にして此鏡が多くの場合に於けるが如く其埋葬者常用のものあるか、或は宗教上の儀式に依りて新に別箇のものを打ち破りて埋めたるかは尙研究を要する事だらあり。要するに如上の事實は何れも銚子塚の後圓の部分を發掘したる事實にして更に長柄の部分を發掘せりしが終に何物を得る能はずして止みき。思ふに銚子塚に於て遺物の存在せるは多く後圓の部にして、長柄の部には當初より之に何等の遺物を埋めざりしものと見做すを至當ありとせんか。而して此銚子塚の外部には埴輪樹物の存在せりし何等の形跡をも認むる能はざりしあり。最後に予は此古墳の築造時代に言及せざるを得ざるが、此古墳も亦た彼の延岡天下に於ける銚子塚と同一時代に築かれたるものと云ふに留めんのみ。

又此銚子塚の断崖(北)に面せる部分は比較的廣き平面を有して面かも何等古墳の存在せるものを見ざるが其反対の方向たる南邊に於て此銚子塚の陪塚と見るべきものを認めたる。而して此陪塚をも發掘したり。這是圓形の土壇にして石都を有せずして唯だ土を盛りたるに留るあり。内部の四隅には祝壽土器の施に類するものを並列し或は單獨に或は二箇を重ね、或は四箇の多きを重ねたるなど、其並列の法一定するなく中央には劍を安置し其他には鐵數個、埴製の高杯の破片數箇、祝壽土器の破片等にして此等以外幾に何物をも發見する能はずして已みたり。

次に銚子塚は西北に存せる陪塚をも發掘したるが、是れ亦圓形の土壇にして石都は無く唯だ土を盛りたるものに過ぎずして全く前者と同形式たり。發掘物は内部の四隅に彼の祝壽土器の施に類せるものを二箇或は數箇宛積み重ねありたると、東南方に於て斧の存在せるを見たり。斧には當初柄をも有したりしが覺しき形跡

あるも今や其木柄は消滅して見るに由なし。又更に東北に位せる陪塚をも發掘したるが、其形式前二者に同じ發掘物は小刀、鎌等にして其側に齒の破片と瑞玉を見たるに止りたり。

以上の事實に依りて本墳と陪塚との關係を知るを得たるが、元來陪塚には如何ある者が如何ある狀態に於て葬られるかは最も研究を要す可きことにして、由來之が事實を明にしたる者萬だ稀あり。然るに子が今回之の調査に基けば陪塚あるものゝ特徴は各其埋葬せられたる器物が互に相異なるを見る。即ち陪塚には主として武器を出すと見れば他の陪塚には土器類を主とし、或は玉類を主とするものもあるが如く各相異なる器物を有することにして、是に依て之を見れば當時の死者を葬りしてふ心理狀態は寛も生前に於けるが如く臣下の關係自ら厭然たるものあり。即ち其主君に仕ふるに各特殊専門の司仕を爲すが如く殉じて遠く黄泉に赴くに際しても亦此特種司仕の心を以てせりしや明にして、或は武器を以て主君を守り、或は専ら食膳の事を司り、或は調度裝身の事を以て仕ふる等其陪塚の特徴自ら臣下諸司の別あるを見るあり。彼の天津落火が亡せ給ひし時に際し、河雁を被佐理持とし、鷺を管持とし、墨鳥を御食人とし、雀を稚女とし、雉子を哭女とせりし神話傳説も亦本墳と陪塚との關係に遡源するが如き時合あきにしもあるらず。要するに陪塚が相異なる遺物を以てせる事實は死者に對し何處までも其職責に殉じて先達に奉公せんとする心理狀態の發露を見るを得るあり。

第二十二號墳

第三號墳の陪塚に接して第二二號墳あり。其形式圓墳にして石都を有せざる純土墳たるあり。此古墳内には其上部に二股の矛を安置せられ曾ては其長き柄をも有せしむらんも、今や既に消失し盡して縄に矛の穂先

をのみ認むるに過ぎず。而して其左右には矢を束にしたるが有りて又其下には刀劍及劍ありて其間には大なる二本の鏑矢の横はるを見此墳よりは全く武器以外に於て何物をも見出す能はず殊に刀劍は熊く保存せられ在りて、柄の附著せる作りあざしが研究資料として注意すべきものたるなり。

第二十三號墳

第廿三號墳は前方後圓式にして西隣第廿二號墳に接せり。其後圓の内部を發掘せしに等しく無石室に屬すれども二段に製造せられ、其段級の高さは一尺五寸にして段級の上部には何物をも認めざりしが、其下部に於て四本の劍の並列はあるを見たり。次に前方の部分を發掘したるに總ての場合に於けるが如く此部分に於ては絶に何物を得る能はずして止みたり。

以上は銚子塚より第廿三號墳に至る一群の古墳帶を發掘したる事實にして、此等發掘調査の事實に就くれば粘土棺は最も大なる銚子塚以外に於ては之を認むる能はず。既に前年東西南大學の諸氏に依りて試みられたる成績に従するも同様の事實を見るのみあらず、予が延岡に於て爲せりし、結果に見るも亦然りとせば、粘土棺は銚子塚の如き大土壇に於てのみ見出されるべきものにして小土壇には之を見る能はざるものと断ずるも敢て不可あきが如し。而して圓墳には一も棺あるものを認むる能はざるもの或は木棺の存在せりしや如何は疑問にして現時其形蹟を見る能はざるが故に容易に之を断する能はざるもの、或は曾て之を有したるやも知る可からず。

第一號墳

予は以上多くの古墳地帶を離れて第一號墳をも發掘せるが、該古墳は其形式角環即ち方形式にして其隣に

相接して一個の圓塚の存在せるを見たるが此等二個の角塚と圓塚は共に其周圍に塹を掘りたる形跡を有し其前方に於て三個の陪塚をも認めた。予は方形塚に手を下して發掘を試みたが、無石塚にして單に土塙中於て遺物の存在を認めたり。今其存在せる状態に就きて記さんに、其北隅に於て一領の鎧の纏れるを見た。鎧は周圍二尺五寸許にして尙少しく北方に張りて長さ三尺六寸の大刀の安鐵せるありて其側には劍及矢殼を存し、劍の尖端の部分には一本の矛を置き、矛と劍との側には人骨の如きものを認めしも之に觸るれば直に其形を失へり。斯の如く其方形塚は武器のみにして玉類及土器類等の如き一も之を認むる能はざらしより。而して此塚の周圍は一面に小石を以て敷き詰められたるを見たり。

予の祭土原に於て發掘調査を試みたるものに略ば以上の如きものにして、他は外形に就きて研究し、或は既出の遺物を檢して調査を遂げたるあり。斯の如く祭土原は種々の形式の古墳を有すれども其年代に於ては各相違せるものあるを疑はず、彼の山陵と稱せらるゝ男狹穗塚・女狹穗塚の二大古墳も其形式各相異れるよりすれば強て之を同時代のものと斷せんには躊躇とも異りたる形式を以て葬られたるものと云はざる可らずして多少の矛盾を生ずるの嫌ひあきに非らざるあり。而して如上の古墳は何れも第三紀の丘陵上に築かれたるものあれども、茲に尚注意すべきは其丘陵の下部に於ても幾多古墳の散在せる事實あるを見るあり。即ち三宅神社の鎮座せる丘陵の下に於て一瀬川に注ぐ一支流のある在りて所在一帯に冲積層の平原を形成し所謂笠狹岬と稱するもの即ちして土俗に從へば此附近一帯は昔時海にして現在の丘陵断崖は當時の岸に當り海水を以て洗はれありしを云へり。然るに此低基沖積層の流に近接して古墳の點在せるものあるを見圓塚あり前方後圓式の大なるものありて此等は丘陵上に於けるものと同時代たるを疑はず。若し土俗の稱するが如く附近一帯の海たりしこそ此處に古墳の存在せる事實は甚しく矛盾せるを想はすんばあらず。之を如何に

考ふるも跡くとも冲積層の出来したる後に於て古墳の築かれたるものと云はざる可らず。而かも此等古墳の附近に於て尚河流の存在せるが如き一考を要する問題たらすんばあらざるあり。而して斯の如く河流の附近に古墳の存在せる事例は之を外にしては尚ほ妻神社附近に於ても亦認めらるゝ事實あるが、元來祭土原附近に於ては國府及國分寺の設けありて奈良朝時代に於ては此地が日向の中心地帯たりしより見るも、古來依然として此狀態に在りしものと見るを至當ありせんか、要するに此地を以て日向の中心とし、一方は一瀬川を隔てゝ茶白原及新田原より高鍋に波及せる丘陵の發達を見、尚一方は高屋附近までに及び、其背後は所謂日向山脈を以て屏風の如く之を圍繞し其尖端は第三紀の丘陵相平行して美々津附近に達し延岡を以て區割し尚一方は南の方青島附近に延長し地と境を接するに至れるを見る。而して此第三紀層の丘陵に屬する地帶は自ら日向の中央部を形成せるものにして此處に國府及國分寺の設けられたるは抑も偶然の事には非ざるる。尚此祭土原の古墳分布は決して限られたるものにはあらずして一方は高鍋附近に及び、又他の一方は高屋附近にも達したるものにして、畢竟此等一帯の古墳分布は同價値の下に批判と研究を試むる的眼光を有せざれば、終に其真相を捕捉する能はざるものあるを思はずんばあらず。

大淀川流域 大淀川は諸縣郡を流れて宮崎附近に來り以て海に注ぐものあるが、此流域に於ても亦古墳の群在を見るあり。即ち宮崎を去る北方數里にして大淀川に瀕したる地に大宮村あり。此大宮村に於て小なる第三紀の丘陵露出し其上には殆ど丘陵に作り附けにしたるが如き大古墳のある在り。這是今奈古神社の境内にして古墳は神社の拜殿に接近し、現時神社の鎮座せる部分は該古墳の附屬地たるあり。此側に尚一個の陪塚の存在せるを見る。而して本塚たる大古墳は前方後圓式にして三段を爲し、正しく南北に位置せるものにして此古墳を去る約廿町にして第三紀の丘陵の發達せるあり。此上にも亦一個の古墳存在し土俗之を遠目塚と

稱し居れり。此遠目塚は予の是迄見たるものゝ中最も高き所に存在せるものにして第三紀の高き丘陵。寧ろ山の上に存在せるが故に遠目塚の名稱の由て来る所ある可く、斯の如き高所に於けるものは予の日向に於て未見に屬するものたり。今此古墳に佇みて四方を望めば宮崎附近の如きも指顧の中に在るあり。而して此古墳は一方よりすれば前方後圓式とも見られ、又他の一方よりすれば銚子塚とも見らるゝが如く種々の形式に見られ當に之を日向の何れに見ざるのみあらず日本全國に於ける古墳中に求むるも未だ斯る稀有の類例あるを知らず。實に一個特種の珍現象を呈せるあり。這是山の脊を利用して築きたるものにして其形脊臍骨に類し、中央部は圓形にして是より三線を出して其方位正しく中央よりせば真に東西南北に向へり。而して形式より云へば前方後圓式にもあらず、又銚子塚にもあらざる一種別個の形式として定めざる可からず。元來此形式は原始的にして他の古墳の形式と自ら其性質を異にするのみあらず高き山の上に存在せる一事既に他と異なる點にして予を以て之を見るに寧ろ他のものよりも一層古きものに屬すべきを疑はず。予は此に多大の興味を以て此古墳の發掘を試み以て大に研究の資に供せんとせしが、縣當局の之を許さるるものありしを以て終に手を下さずして止みしも、斯る稀有の形式と特種の性質を有するものゝ内部及其遺物の如何あるかは最も興味あることにして、之を暫く今後の研究に保留せざるを得ざるを遺憾とするものあり。

大宮村より大淀川を隔てゝ其西岸に生目村字跡江と稱する地あり。此地の丘陵上には無數の古墳存在し其中に於て特に四個の大古墳を計算するを得たり。此等四個の大古墳は何れも前方後圓式にして頗る大あるものたるあり。要するに此等古墳分布地は看過す可からざる重要地點たるを失はず。

跡江より流に沿ふて遡れば本庄ある一小市街に達せん、此地は殆ど古墳群中に存在せりと稱するも敢て不可あき程にして、其古墳の無数ある驚く外あし。而して此處にも亦大古墳に富み其形式或は前方後圓あり

或は銚子塚あり或は圓塚ありて、殊に銚子塚の如きは特に完全ある形式のものを認め得る。而して本庄市街は全く古墳の間に町をなせるものにして、市街の神社の如きも亦古墳の上に設けられたるを見れば如何に大古墳に富めるかを想察するに足らん。彼の藤井貞幹の桂林漫録中に記せる甲冑は此古墳群中の猪塚より出でたるものにして、他に上長塚^{アガツカ}と稱するものは大なる前方後圓にして、其周囲には埴輪の存在せることも體氣ながら認められたり。而して此埴輪の中には曾て土偶の稚はり居りしものと覺しく予は鎧の楯^{タケ}と思はる埴輪の破片一個を得たり、斯の如く本庄は古墳群地あるが由來諸縣の地たる歴史上著名の地にして、彼の景行應仁、仁德等の豪朝多くの美妃美女を出したる所にして景行の泉姫の如き、仁徳の變長姫の如き何れも諸縣より出でたる女性たるあり。予は跡江附近より本庄方面に亘る古墳は終に發掘を試みざりしも、其外形より觀察したる狀態又は埴輪の古墳を圍繞せる様あざ燐た畿内地方に於ける色彩を連想するものあくまばあらず。然るに諸縣は上代に於ける黃金時代とも稱すべき應神、仁徳の頃と密接ある關係を有する点あるが故に畿内地方の色彩の深ふことは寧ろ拒むべからざることにして、其姻戚關係及時代的流行の影響を受けたるものと解するに難からず。元來諸縣の古墳は彼の葵白原に於ける葵白塚の如き又高輪附近に於けるものゝ如き何等か同時代に屬するものゝ如く考ふる點なきにしもあらず。尙大淀川を下りて宮崎の地に到れば宮崎神宮の社ありて、此社の側にも大なる數個の古墳あるを見る。這は前方後圓にして曾て此附近は一帯に古墳の群在せし地帶たりしを覺ゆるあり。又更に宮崎の北櫛村にも二個の古墳存在せるが、這は新しき冲積層の上に存在し其一は砂丘の上にあり。他の一は砂丘の側にありて形式は何れも前方後圓あるが、砂丘の古墳よりは曾て曲玉、此等を發掘せしむることありて、此等は曲玉、管玉を用ひし頃の築造に係れるは明かるも、新しき冲積層の上に存在せるより見れば其年代亦た知るべきあり。要するに大淀川流域に於ける分布は頗る豊富

にして、一瀬川の流域に於けるものに比し決して遜色を見ざるものと云ふべきなり。

横穴

此大淀川流域にも亦横穴の存在せるを見る。先づ宮崎方面より云はんに、宮崎を去る一里餘の西には一帶に第三紀の丘陵發達し、住吉村に於ける丘陵に至りて横穴の各所に存在せるを見、此等を發掘すれば多少の望を図するに足るものあらん。而して其形式は最も簡單あれども内部の構造は大にして複雑あるものあり。即ち死者を安置せし處は之を一段高くし天井は圓形にして一面に朱を塗抹し下に溝を穿てり。之を延岡高鍋地方のものに比するに横穴の構造としては宮崎附近のものを以て最も進歩發達せるものと云はざるべからず。尙ほ大淀川に沿ひたる瓜生野村ある岩戸神社も第三紀の丘陵上にありて其奥殿は横穴を利用して更に其附近にも一個の横穴を見る。這是最も面白き位置を占めたるものにして、丘陵の延長せる尖端に於て施も前方後圓式をあせるものゝ後方に設けられるあり。されば一見前方後圓の石槨の露出せるかの感あり。而しそ其入口は全く此丘陵の脊に向ひて面せるが故に此横穴の築造者は有石槨古墳を知れる者にして之を横穴に應用せりしものと見ざるべからず。而して内部は奥行一丈五尺、幅一丈二尺にして入口の幅五尺五寸、位置は正しく東南に面し入口を南にせり。内部の掘方は最も粗雑あるも高さ七尺に達し入口には一種の彫刻を施せる模様の形跡を見る。思ふに斯る横穴は之を日本全國の例に徴するも稀有の事にして頗る興味あるものと云はざるべからず。

三田井(高千穂)

三田井は所謂高千穂の稱ある地にして西臼杵郡に在り。延岡に注ぐ五箇瀬川の上流に位し四圍山を以て圍繞せられたる盆地を形成し東方に於て五箇瀬川の溪流に臨めるが故に此に自然の交通路開け西方は山道に由りて肥後に接せり。斯の如く遡在したる山間の地あるに拘はらず横穴の存在頗る豊富あるものあるも不思議に一の土壤の存在を認めざるは之を下流延岡附近の状態に比して頗る奇異の感あくんばあら

す。而も横穴の形式種々あるが故に日向に於ける横穴を研究せんには此地を撰むを以て最も便ありとせん。此等三田井の横穴より出でたる遺物は何れも此地に於て保存せられあり。而して其構造の状態より云へば或は簡単に掘られ、或は稍之より進歩し内部も多少廣きものあり。其最も進歩せるものは中央に寢床の如き一段高きものを設け天井には棟梁の如きものを掘り付け又壁には柱の如きものを掘りつけありて一面に朱を施せる形跡を見る。斯く形式は簡単複雜交もあるも内部は何れも左して廣きものにあらず。其最も廣きものにして奥行七尺、幅八尺のものより奥行六尺五寸、幅五尺七寸のもの或は奥行五尺二寸、幅三尺五寸に至るものありて天井より地床迄の高さは何れも左程高きものはあらず。最も高きものにして二尺七寸乃至三尺六七寸位に過ぎず。故に三田井の横穴は其構造よりすれば狭小ある部類に屬すと云はざる可からず。就中其複雜あるものに至りては一面に朱を施せるのみあらず入口に於て其形に准じたる一枚の石の戸を締め込みありて其外部には土を以て覆ひ居れり。然るに其内部より出づる遺物に至りては大に見るべきものあり。即ち甲冑武器。曲玉、管玉、瑞璫玉、硝子玉其他裝飾品等からず。殊に太刀の劍頭の如き、或は馬具の如き何れも鍛金を施せるを見る。尚之を外にしては土器、手環、鎧等をも見出し得られ大凡一通りのものは之を備ふるものと云はんよりも寧ろ他の土墳よりも豊富ありと云ふを得可し。又曲玉の如きは玉類の外に瑪瑙あり出雲石あり水晶ありて其形より云へば土墳に比して其美觀優雅の狀多少相劣れるものあるあり。殊に管玉の如きは土墳よりするものゝ如く優小あるものにはあらずして比較的大ある傾向を有す又硝子玉は現時の南京玉に比すべく其色は青色、藍色、黃色、赤色等を存せり。

三田井を去る數里なる岩戸村にも亦横穴の存在せるを見るあり。而して其構造は三田井に酷似せり。又三田井と肥後阿蘇郡に接せる園境の入口に於ても横穴の存在を認めしが、是亦三田井のものと酷似せるを見た

り。要するに此等三田井附近の横穴は何れも同一分布系統に属するものにして尙深く肥後及豊後の事實を比較すれば必ずや興味ある問題に觸るゝものあらん。

第五 山城の遺跡

予は日向の土墳、横穴たる古墳に就きて其形式及内部の構造に關する説明を試みたるのみあらず其遺物に就きても亦述ぶる所ありしが、日向には常に斯る古墳のみあらず之と共に其時代を見るに最も大切ある材料を有す。是れ即ち予の茲に述べんと欲する山城に就きての問題なり。

抑も山城あるものは丘陵の尖端又は其上に或は高き山の上に設けられたる皆即ち要塞の跡にして、當時の戰鬪防禦に供したる遺跡たるなり。斯る遺跡は北朝鮮滿洲等より我北海道構太竝に奥羽地方に存在せるものにして、最近信州等に於ても尙且つ此事實を認むるものあるに至れり。然るに予の日向を調査するに及びて此處にも亦此遺跡の頗る多く存在せるを見る。即ち此場所は必ず其附近に水流の要害ありて、前は絶壁断崖を爲し、後は山に連りて其頂上平坦にして一の富士形を呈し、二段若しくは三段の塹を設け、此の塹の中に於て外敵を防禦したるものあり。而して此遺跡として云ふべきは彼の五箇瀬川に枕みたる高千穂四皇子塚の如き即ち是にして、此處にも塹の存在を見、前方の絶壁を爲せる部面には一段の塹を設け、後方の山に連る部面には二段の塹を設けありて頂上平坦あり。傳説に由れば天孫の四皇子が此山頂に會して遊び戯れたる所と云へるも、是れ明に山城の遺跡たるあり。尚高千穂の「タカコボ」と稱する處の如き、前方絶壁の部面には塹を見ざるも、後方に於て三段の塹を有し頂上平坦あり。又同地の花ノ木山と稱する處も此形式にして、後方の面部に二段の塹を有せり。而して花ノ木と云へる其木は「キ」即ち城を意味するものにはあらざるか。

以上は高千穂即ち三田井地方に於ける事實あるも。此形式は北海道、樺太、満洲、北朝鮮等に存在せるものと同形式にして、アイヌの所謂チヤシと云へるは即ち砦の古形にして此「チヤシ」よりは石斧、石鎌類を出すより見れば、其時代の或は石器時代のものにして、我祖先の其後之を利用したるものあるやも圖るべからず。而して斯る遺跡が日向に存在せるは畢竟三田井の如き未開遼遠の地にして而かも最近までは樹木繁茂して森林を爲せしがため自然的保存に好都合ありしものと云はざるを得ず。此に思ひ出さるゝは彼の奥羽地方に於ける館跡と稱するものにして、之が比較研究上忽焉に附すべからざるものたるを疑はず。

尚此三田井より五箇瀬川に沿ひて延岡に下るの間に於て鞍掛山を初め其他各所に之が遺跡を見せらるゝもの渺からず。而して延岡附近に於ては其北方に東海村字祝子と稱する地ありて此處にも其遺跡を見るあり。這是後方山に連るも其前方は冲積層の平地にして下より之を見るに明かに塹の跡を望むべく、之を踏査するに三段の塹を設けあり。其他斯る遺跡は高鍋地方に於ても認めらるゝものにして、即ち其代表とも見るべきものは小丸川の流を挟みて相對せる二個の砦の鼻の突出せるを見る即ち是あり。這是三紀の丘陵にして之に塹の形跡を存し、且つ頂上平坦あり。斯る状態は恰も磐城國東磐井郡に於ける鳥海の櫛の一河を挟んで相對せるに似たり。而して前者の頂上よりは石器を出し其南方の塙を高城と稱せり。即ち明に古語の「タカギ」にして此古名も亦能く残れるものと云ふべく彼の神武天皇の御製に

『宇陀能多加紀爾志藝和那波留云々』

であるは即ち是にして高鍋の城の如きも第三紀の丘陵にして今や其構造大に變化し居れども曾ては必ずし此形式の時代ありしものと推するを得べし。抑も高鍋は元來財部と云ひしものにして延寶元年今日の高鍋に改めたるあり。而して高鍋の城趾は文武天皇の時に於て築かれたりと稱する事實ありとすれば當時の形式は必

すや山城的形式を備へたりと覺ゆるあり。即ち今日にても此考を抱きつゝ之に對すれば一種壕の形跡を見るに難からず。更に高鍋を南に下れば高田村にして此處にも第三組の冲積層の中に突出せるありて此形も亦同形式を帶び俗稱之を鬼付女と稱し彼の鎮西八郎爲朝が此に占據せりしてふ傳説を有す。

又一ノ瀬川を通りて妻町附近に赴けば此種の遺跡に當めるが就中右峯城趾の如き三段の壕を有せるものにして其麓に水流のある在り。又總北の如きも島之内の前方一ノ瀬川を控へて三段の壕を爲し後方は茶臼原の丘陵に接せり。又彼の總北の南方都於郡村に於ける有名ある高尾城の如き景行天皇の行宮たりし事蹟を傳ふるものにして規模頗る大なるが故に一見何等の注意を喚起せざるも遠く之れを離て遠望すれば明に遺跡たるの形式を具備せるを見るべし。予は此遺跡を以て當時高貴の人の居住せられし場所と見るものにして既に之を高屋山上之陵とせられるも寧ろ此場所を以て山陵とせんよりは宮居の如きものゝ跡と見るを適當あらん。と信する者あり。又砂土原城の如きも三段の壕を有せるにはあらざるか。其他都於郡村黒貫寺の地基の如きの亦然りと信する者あり。尚宮崎より南に向て進めば青島を望む所ありて此處にも館跡の形式を認むるもの在あり。

以上列記したものは何れも原始的形式を帶びたる山城の遺跡にして此等は後に至り戰國時代の群雄割據の時に及んで諸豪の占據せる城塞に用ひられたれども要するに古代の山城を應用したるに過ぎざるあり。而して戰國時代の用に供せられざりし彼の高千穂の諸遺跡の如きはは延岡附近観音の遺跡の如きは最も明確に立證せるものにして、元來斯る形式のものを終に戰國時代に至りて當時の築城に利用せるものと見るべく此等原始的山城は日向に於ける古代の研究上最も大切な資料にして以て共に相比較するに於て其變遷の状をして古墳の多く存在せる地點には必ず此等原始的山城を見るなり。是れ畢竟當時の住居跡

即ち城下の跡として研究すれば古代住民の分布及各勢力範囲等歴然として活躍し来るを見るに非ずや。して斯る事實は更に朝鮮及其以北の大陸に於けるものと能く相類似せるものあるあり。即ち古墳及山城の存在は大陸より此處に分布し來れるものと見れるを得可し。然るに此等の事實は沖縄より臺灣其他南方諸島に於ては決して認むべからざる現象たるに著自せざるべからず。故に此等原始的山城は我祖先のみらず有史以前の民族も尙且つ之を使用し更に我祖先も亦之を用ひしものと見ざるべからず。されば或る意味よりすれば此山城は有史以前に於ける吾人と關係あき民族よりして我祖先に至るまで連續したりしものと云ふも敢て不可あきを知るあり。

第六 結論

以上の如く予は日向の遺跡遺物に就きて調査したるが更に之を總括すれば、日向には古く日本全國に居住せりしそ同一民族が未だ我祖先の此土に渡来せざる以前に於て既に居住せしもあり。而して其文化の程度は石器時代にして其後我祖先の初めて此土に天降りましてより諸種の蕃族を征服したるものにして若し彼の彌生式土器の出る遺跡を以て我祖先のものありとせば我祖先の此土に住ひし時代は實に最古の時に屬し強て所謂天孫派と稱する者の時代を求むれば予は即ち中間土器なる彌生式の出づる遺跡を以て之に充てんとするが如き。而して我祖先は大陸の文化の影響を受けて此に古墳を築き或は漢的銭及玉等を使用するに至りしものである。即ち此點よりすれば妙くとも古墳築造の時代は漢代以前に遡るを得ずして寧ろ後漢或は晉當時の時代に置くを以て最も隱かなる見解ありとせん。

西都原歴史蹟研究所出張概報

〔大正三年八月〕

京都帝國大學文科大學教授理學博士 小川琢治

一。調査員發著

大正三年八月十五日、文科大學助手島田良彦京都出發。大部分石佛を調査し廿七日正午還着。

八月十八日、文科大學講師文學士今西龍、同大學辰巳原末治京都出發。海路經島上陸二十二日還着。文科大學生神浦萬十郎船長時より鐵道にて委託。二十三日共に研究所に入る。

八月二十五日、文科大學教授理學博士小川琢治京都出發。二十九日宮崎を経て二十九日研究所着。

八月二十七日、文科大學助手文學士内田寛一郷里鹿児島出發。二十九日宮崎を経て研究所有着。

此の他小幡高等商業學校教授文學士寺田貞次、島田調世の途次三十日夕來着。一行に參加す。

今西講師以外の一行は九月二日朝出發歸途に就き、今西講師は宮崎に於て殘務を處理し九月三日出發歸途に就く。

二。調査作業日誌

八月二十四日、牛頭神浦梅原城分寺遺址を調査し牛頭名跡神宮跡ヶ池方面を調査す。

八月二十六日、今西講師井伊郡梅原と共に輕技子江藤盛長の跡跡にて新田原の古墳及び石船塚を調査す。

八月二十七日、古殿祭及び越後史跡研究所開所式の舉行あり、今西講師之に參列す。神浦梅原は同日西都原古墳を監督す。

八月二十八日、今西講師島田神浦梅原と共に茶臼原方面の遠蹠を調査す。

八月二十九日、小川教授今西講師井伊郡梅原古墳を監督す。神浦梅原は都於郡下三財平群方面を調査す。

八月三十日、今西講師井伊郡梅原及び舞香龍田村正、西都原第四城塚、第〇號塚の發掘調査を行ふ。使役人夫十八名なり。

小川教授、内田、島田はこの日青島を観察す。

九月一日、梅原は見瀬郡書記齋藤兼治の嚮導にて高鍋方面の古墳群を踏査す。

三。遺蹟調査概報

西都原附近遺蹟の概括的調査を今次調査の主なる目的とする。其の各地踏査の概要は左の如し。

(一) 児湯郡新田村の古墳群。調査せる古墳群は同村小字祇園原より小字曲り久保、東俣、古開の邊に亘り數多散在し其形狀は瓢形墳、柄銚塚と稱する式のもの、雙幕式のもの丸塚等種々にして其數四十に達す。就中注意すべきは大久保塚、百足塚、瓢簞塚、曲り久保ノ一丸塚及彌五郎塚あり。

大久保塚は祇園村落の南方に接し、前後の徑四十七間、前方の幅二十五間後圓部の高さ二十餘尺あり。南北東に面せる大瓢形墳にして東側には墳頂尚ほ畠地ありて存し、小竹塚上に寄生す。

百足塚は小字東俣に在り南面せる瓢形墳にして前後の徑四十間後圓部の徑二十間、同高さ基底より二十二尺ありて完形を存す。附近の畠地に埴輪圓筒の破片多く散在す。

瓢簞塚は百足塚の南西に位せるものにして二段より成る。此の塚は雙幕の式に類似し二十餘年前其の一塚より埴輪土偶の破片を出し、其現品今宮崎神宮微古館に陳列せり。

曲り久保ノ一丸塚は此の西方二十數間にあり、一段に築き其完形を保存し、基底に於ける徑十五間高さ十五尺餘あり。

古開の彌五郎塚は松及び雜木の密生せる林中に在りて正確に調査するを得ざりしも新田原最大の前方後圓墳あるべく北東に面し周圍に尚ほ幅約八間深さ五尺内外の墳頂を存す。

此の他霧島塚と稱する大圓塚あり祇園原南西の臺地の邊端に在りて断崖上に築けるものあり。

(二)、新田の石船塚。新田村小字荒の北方道路の傍に在る瓢形墳を指すものにして、松林を成し、稍原形を損せり、此の後圓部の中央に石棺寶石の稱呼に從ふは石龕ならんと稱するは蓋此の西北々西に向ひて露出し蓋裂けて一片とあり其の傍に存す、石船塚と稱するは蓋し此の棺蓋あるが爲なるべし、棺は普通の彫り込み式のものにて安山岩の一種より成り、其の函の總長八尺二寸幅三尺八寸高さ二尺あり蓋又之に相當し高さ一尺三寸の屋根形を成す、但し繩掛突起を見ず其の形大あるも製作粗笨あり、此の棺函の東側に試掘穴あり、又墳中に井あるは後世掘りしものあるべし。

(三)、千畠の石室ある瓢形墳。上穂北村大字千畠小字櫻田に在り、一之瀬川に望める臺地端に東西して築けるものにして目測に依るに前後の徑凡そ二十間後圓部の臺地基底よりの高さ二十三四尺あり、塚の表面を葺ける礫石多く存する。埴輪圓筒は之を見ず。

此の後圓の中央に南二度東に面して横穴式石室花崗石等の稱するものの口開き其の兩側壁は上に狹き梯形を成し總長四十尺八寸五分玄室の幅八尺八寸五分隣道の幅五尺七寸あり、此の塚の如き埴輪圓筒らき瓢形墳にして横穴式石室の存するは本邦古墳墓制の新古兩期の中間に位するものにして例殆んど稀あれば此の塚は頗る重要な一資料ありとす。

(四)、池の城址、同村大字上野小字池城は池の城の遺址あり、此の地一之瀬川北岸の臺地の端に位し崖断を利して築けるもの、東、南、西の三面は天然の崖をあし北の一方のみ臺地に連り此の方面に深さ一丈内外の三重の空隙を作りて防禦に充て、頗る要害の地あり。傳へて伊木加賀守の居城と云ふ。

(五)、上野村東方の古墳群。同上野村の南東にして池の城址の東方に當れる臺地上に在り、其數二十に近く何

れも丸塚にて現存の高さ七八尺徑六七間のもの多し構造は礫石を以て葺きたるものあるは多く附近に其の用材の散在せるに依りて之を推知し得べし埴輪圓筒を見す。

(六) こやね塚と其附近の古墳。翠は茶臼原草原の中央に在り、三段に築ける大なる瓢形墳にして南西に面し前後の徑約五十間後圓部の高さ三十尺近く中央部の兩側に圓形の造り出しあり且つ周圍に八間内外深さ三四尺の隙址を繞らし形式頗る完備せり、唯後圓部の中央發掘されて主要部破壊されたるを遺憾とする。此の前面の西隅に高さ四尺五寸周圍三十間内外の丸塚あり陪塚あるべし是れ亦發掘の厄に遇ひ土器、埴輪圓筒、鐵片等の存在せるを見る。

又こやね塚の後圓部より西方に一直線をあして約百四十間、四十間、二十間を隔て、三個の丸塚の並列せるあり、古墳の配設上注意すべき現象ありとす。

(七) 都於郡の諸遺蹟。都於郡に於ける遺蹟としては同村大安寺境内にある佐土原落闕の裏、景行帝の行在所の跡と傳ふる黒貫寺、高屋山陵と伊東氏の舊城址、光熙寺附近の石器時代の遺跡を舉ぐべし、されど黒貫寺は漠然行在所ありしを傳ふるのみにて遺蹟として徵すべきものを存せず、高屋山陵と稱するもの又伊東氏築城の際破壊されしと云ひ其址と傳ふる地點に大石の存せるご塚の葺石かと思はる礫石の附近に存在せるのみに止り伊東氏の城址のみは三財川の南岸の臺地上に存し上部平坦南西の一部には隙の址尚存し當時の面目を芳揚し得べし。

(八) 龜塚村の龜塚と其の北方の古墳群。下三財村小字龜塚の北方臺地端に近く龜塚あり。周圍を削られて形を損せるも丸塚あるべく現存せる徑約十二間高さ八尺内外ありて塚上礫石を葺ける跡見ゆ。是より北々東に延びたる臺地上に更に三十餘の丸塚あり今殆んど開墾されて畠であるも封土尚ほ残り其形狀

を推知するを得、基底部の徑十二三間のものより四五間のもの、高さ又四尺以上十三四尺に上るものあり、構造何れも一様あるが如く礫石を以て塙の表面を葺きたるものにて用材多く存す、埴輪圓筒を見ず、

(九) 中の別府の古墳群。三財川之西方、龜塙の北方の小字中の別府の臺地上に又群集古墳在り、其數二十に上るも多く周圍を削られ主要部を破壊されて今僅に残形を存するのみにて特に注意すべきもの有し。

(一〇) 井上の丸塙。平群村大字井上の畠中に在り、丸塙にして今開墾され裂烟とも破壊甚だしく縦に形を存するのみ附近に埴輪圓筒及び脊瓦の破片存在す、數年前此の塙を開墾するに際し漢式鏡を發見せり云ふも今傳らず。

(一一) 松本の船塙。松本村落の西方田中に在り南微西に面す二段に築かれたる陸部に圓形の造り出しを有する但今存するは西側のみ完全ある瓢形を存す但後圓部は發掘せられたるべく上部平坦とあれり、大き前後の徑約五十間前方の幅二十五間後圓の徑二十八間内外高さ三十尺あり、西方に當り二三の小丸塙散在す蓋し陪塙あらん。

西都原附近には船塙ある名稱の瓢形塙、此塙の外に三宅村小字鳥子と西都原の北端に在り、是等の塙の名稱は土俗石棺を石船と呼び而して此等の諸塙何れも發掘の形跡あるより推して翌ば其の内部に石棺を有したりし構造あるを推知せしむ。

(一二) 西の別府の古墳群。川南村小字西の別府の南方臺地上に散在せり。其數四十に上るべく而かも多くは瓢形塙にして丸塙は陪塙と思はるものに限り外形を觀るに是等は皆一様に東向にして表面礫石を以て葺き埴輪圓筒を有するものにして殊に前後の徑二十間の小塙に至るまで完形を具し未だ發掘されたる事あきが如し、墳中最大あるものを俗に御塙と稱し周約三百間後圓部の高さ四十尺に近く前方部には遺址發り陪塙三四

を有す。

(三) 持田坂本の古墳群。上江村小字鬼ヶ久保より同持田坂本に亘る小丸川北岸の臺地端に近く亦古墳群集す丸塚多く何れも破壊甚だしきも獨り持田のはかり塚及び坂本の石船塚の兩種形塚は幸に完存し殊に後者には石棺の露出せるを見る。

ばかり塚は南北東向にして前後の徑約五十間後圓の高さ三十尺内外あり現に樹木繁る。

石船塚亦畧ば同方向に面し前後の徑百四十一尺、前方の幅七十八尺、後圓の高さ二十二尺、北西に全封土礎石を以て葺ける小階築を伴ふ、石棺は後圓の中央に露出せるものにて今破壊され數多の破片であるを以て正確に原形を知るを得ざるも其の殘部より畧ば其の形狀を推知し得べし、即ち函と蓋の二部より成る彫り込み式石棺にて蓋は把手ある屋根形を成し近畿地方に普通ある形式あり、たゞ注意すべきは函の底部に四寸五分に三寸の水抜き穴の存することにして是れ全く他に類例あきには非ざるもの頗る珍とすべきあらん、質測し得たる寸尺は函の幅二尺六寸同深さ一尺六寸あると蓋の高さ一尺五寸のみ長さ知るべか高す、棺内に朱の附着せし痕跡あり。

四 古 墳 発 掘 報 告

今回調査に於て發掘を試みたるは西都原群集墳中二個の古墳あり左に其調査の概要を記す。

(一) 第四號塚、此の塚は西都原群集墳の中央の東部に位し第五號墳後圓部の北々東約二十間の臺地端に在り樹木多く高さ約十尺徑五十一尺の丸塚あり。先づ塚の中央部に於て南北に二間四方の一區を剝し堀り下げしに北西隅に於て表面より一尺八寸の所に劍の破片六個と柄頭と思はるもの一個を發見し、更に堀り下げたる

に黒色土壤に黄土を交へたる所多く、同三尺の東南隅より劍の鋒の部分を發見したるのみにして表面より七尺に及ぶも此の外何等の遺物を發見せず、此の兩所より出でたる劍の破片を精査するに接合すれば長さ一尺六寸内外の一口となり柄頭らしきもの又之に屬するものと思はる、而かも其の此の如く破片がありて存在せりは以前に發掘せしこあるを示すものあるを以て發掘を中止せり。

此の主要部の調査の外に別に北腹に於て約四尺の幅にて基底部より漸次封土の上部を去り葺石及び埴輪圓筒の有無を發せるに圓筒は存せず葺石は基底部より三尺乃至五六尺の間に存在せるも一般に浪せるが如く其の形狀を明にせず。

(二) 第〇號塚(塚の號標)。第三號塚と第十八號塚の間に散在せる小丸塚の一にして徑二十八尺五寸高さ三尺にして樹木なし、此の種の塚西都原の南部に多ければ其の一例として發掘せり。此の塚に於ても前者同様中央部に二間の方形を刻し掘り下げるに南西隅の表面に近き土壤中より甕の破片の如きもの十數片と三片に破壊せる高环の脚及赤燒高环の破片を發見せるのみにて何等發掘の形跡あかりしに關らず掘り下ぐこと約四尺にして封土以下に及びたるも遺物を發見せざりしを以て此にて作業を止む。此の塚葺石無く又埴輪を存せず。

西都原古墳調査報告

（大正四年七月）

東京帝國大學文科大學講師 原田漸人
同 理科大學講師 柴田常惠

吾人等は大正四年七月二十八日より八月三日までの一週間、鬼怒郡西都原に於て從來の古墳調査事業を實行したり。今回調査したる古墳は、御陵墓參考地たる諸塚跡、既知諸塚跡の北に在する第六十號塚、その二陪塚六十六號塚及く墓地南部に位する第二十號塚にして、右の中第六十號及びうちの二陪塚は原田第二十號は柴山尊ら調査に當れり。而して第六十六號は共同・事に從へり。今うる摘要を報告すべし。

第六十號塚

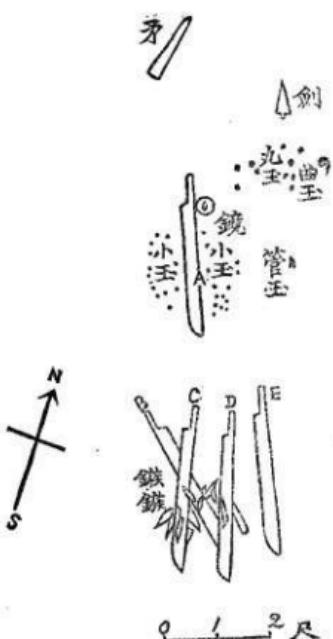
原田漸人

第六十號塚は御陵墓参考地の正北雜木林中に在り高九尺餘直徑十四間の圓墳あり。封土の表面及びその周囲には雜木叢生し、外方よりは殆どその存在を窺ふこと能はず。草本を刈除して始めて輪廓を明にするを得たり。（第一圖）而して本塚の南側に沿て陪塚二基を作ふを見る。主陪三塚の中心距離を測るに、主塚と陪塚第一（主墳に向て左方）とは十四間餘、陪塚第二（主墳に向て右方）とは十五間餘、第一第二兩陪塚は八間あり。本塚の表面雜木を伐り覆土を除きたるに、川石を乗めて整然たる蓋石を施したるを發見したり。該蓋石は塚の基底より高約一尺の地點に始り、同高約四尺五寸の地點に至る幅十七尺の帶を作りて塚の表面を覆らし、その石數三尺四方の平均約四十個を算したり。濠段埴輪等の設置は無かりき。

本塚の頂上を掘り下げるに、土壌は黒色にして諸處に黃色の土塊を混じ、往々粗鬆ある褐色及び灰色土器の小破片の介在せるを見たり。斯の如きは他の古墳發掘の際にも認めたるところにして、古墳築造の當初よ

り封土中に混入せしものと考へらる。既にして東南部に當り、頂上より深四尺四寸の處に於て直刀四口及び鐵鎌許多を發掘せり。乃ち東西十二尺南北十八尺の區域を劃して掘り擣げたるに、南々東より北々西の方向を取り十一尺の長さに亘り、同一平面上に於て、前記遺物の他に直刀一口銅鏡一面短劍一口矛首一個玉類十九個の存するを發見したり。(第二圖參照)

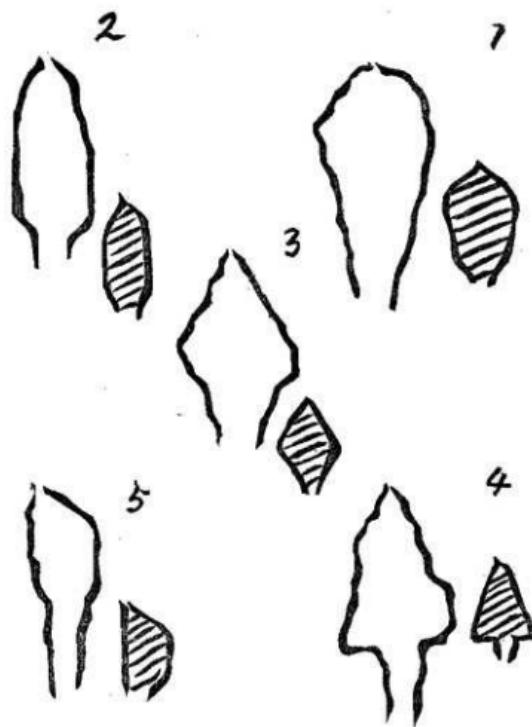
第二圖



遺物配列の狀態を見るに、殆ど中心と思はるゝ地點に直刀三寸二分五厘の銅鏡を背を上にして存置したり該鏡は所謂漢鏡にして、内區に四瓣乳頭を配し、外區に錯青紋を繞らせり。而してその手法より推すに、恐らく本邦製あるべし。鏡縁に少しく重りて直刀一門あり(第四圖)刀を西南に斜端を南々東に向け全長二尺九寸

五分幅一寸四分あり。鐵の北部約一尺四方に亘りて曲玉一個、瑞璫玉三十八個散在したり。曲玉は風化甚しく發掘の際完全に拾得すること能ざりしが、其質理より察して瑪瑙あることを推知すべし。ノ刀の刃部及び背部に亘り約一尺五寸四方の範圍に青色(内一個稍黃色を帶ぶ)玻璃製小玉五十六個及び背部に於て長七分五厘徑

第一圖



二分の碧玉岩製管玉一個及び同断片三個を發見したり。此等の玉類は存在せる部分の土壤を洗ひて精細に拾集したるものとす。ノ刀の東南稍南方に偏しノ刀の鎌端を距る約一尺二寸の處にB'C'D'E'の四直刀及び此上に重疊して鐵鎌約七八十本ありC'D'E'の三刀はノ刀と略その方向を同うしB刀のみは刃を東北に向け〇刀と相交叉して遺存

したり。三刀は全長三尺一寸八分（刀は二尺八寸）刀は二尺九寸三分にして、その幅は刀と同じく何れも一寸四分あり。皆柄及び室の部に腐朽したる木片の殘留せるを見るも、錐その他金屬製具の存在を認めざりき。鐵鐵は多く腐錆残敗しその形完全あるものを取りて之を測るに、長約六寸二分許あり鐵の形式は略ば五種に分つを得たり。（第五圖）鐵莖の中に物の巻き附ける痕跡の殘存せる一片を發見したるが、鐵を等に嵌入する際の方法を見るべきものあり。刀の東北稍北に偏して刀の莖端を距ること一尺七寸の處に鋒を北部に向けて全長九寸の鐵劍あり、劍の西に當り又刀の莖端を距る二尺七寸の處に鋒を北にして長一尺二寸の矛首横はれり。而して遺物配列部の西邊の土壤中に朱塊の混在せるを見たり。

以上遺物配列の位徴より推すに鐵の遺存せし地點は遺屍の胸部に當るべく、遺屍は頭部を北々西に足部を南々東に向け劍矛及び三刀四刀の間に安置せられしものか。然れども遺骨遺齒は巨細に搜索せしも之を認むること能はざりき。此古墳はその封土甚大あるに非ずと雖副葬品の頗豐富ありしと陪塚二基を伴へるに微するに、此中に葬られし人の比較的有位者ありしこと知るを得べし。

陪塚第一（第五十五號）

陪塚第一は第五十五號塚と指定しある小圓墳にして、直徑約六間半高四尺八寸あり封土には灌木密生したり頂上を東西十尺南北十尺の間掘り下げたるに、頂上より三尺三寸の處に於て全長二尺二寸餘の鐵劍一口と長一寸五分許の鐵鐵首三個を發見したり。劍は鋒を西北に向て地平面と直角を爲して横はり。柄及び室の腐朽せる木片殘存せる外に鐵製噴出錐殘片及び柄零きの痕跡を留むる木片數個を附著したり。（第六圖）從來劍の裝具の發見せられたるもの多からざるを以て、此種の發見は研究上有益あることに屬す。鐵鐵は頗大にして

皆三角形を爲し何れも劍と反対の方向を指し、三個隣接して劍に密着せり尙同一平面及び更に深く掘り下げて調査したるも他に遺物を發見せざりき。

陪塚第二

陪塚第二は、直徑約四間高三尺の小圓墳にして、密林に隠蔽せられ僅かにその墳あることを知れり。頂上の北部土壤陥没せらるゝところあり。此地方に於て常に見るが如く松根を掘り出せる爲めのものあるべく、既掘の痕跡とも見ねざりき頂上を中心とし、東西十一尺南北十尺を掘り下げ深地盤に達せしも何等の遺物を發見せざりき。

第六十六號塚

原田淑人

柴田當惠

第六十六號塚は第六十號塚の北方に當り、直徑十三間半高六尺餘の圓墳にして、頂上に松樹其他雜木寄生したり。封土の表面には苔石地輪等の設備を見ざりき。始頂上を掘り下げしに深五尺の處に於て長十二尺幅四尺の略長方形を成せる厚八九寸の黃色土層の東西の方向を取りて横はれるを發見したり。而して該土層の中間空隙を爲せるを以て、周密なる注意を拂ひてその内部の土壤を調査したるに、何等の遺物を發見せざりき。是に於て發掘區域を擴大し黃色土層存在の地點を中心とし、東西十九尺南北十六尺深七尺の大壙を穿ち、更に東西に幅四尺の溝道を作りて掘り進みたるも一遺物の存在をだに認むること能はざりき。而して土層混亂の痕を見ざれば既掘の疑を存するこ�能はず。此の如きは何等の理由に因るか後世に遺存すべき底の物質の當初より存在せざりしか暫く後の研究に俟たんとする。

第二十號塚

柴田常惠

第二十號塚は西都原臺地の南部に在る圓墳にして、東南約七十尺にして瓢形を呈せる第一號塚横はり、南方は約九十尺にして瀬谷の渓谷に接せる位置に存し、封土の高さ十尺餘にして直徑七十尺餘、二三の矮小なる雜木存する外は、一帯に茅茨の茂生する所あれど、能く舊態を保ちて崩壊または發掘の痕を有せざるものあり。

調査に先ち主要部の茅茨を伐採せしに、基底に近く列石の一匝するものあるを見たり。其石材は大抵精良形を呈せる川石にして、長徑四五寸より七八寸のもの多きを占め、方三尺の面積に約四十個の割合を以て一重に敷けり、而して其位置及び廣狹は方位に依りて必ずしも一定せず、即ち南側にては基底より高さ一尺五寸より六尺四寸の間に存し、之を斜面を以て計るに、周縁より五尺四寸の地點に始まりて、列石の幅は十五尺を有し、北側にては高さ一尺四寸より四尺五寸の間にありて、斜面を以てすれば五尺五寸の地點に起りて其幅十尺八寸を有し、西側にては高さ一尺九寸より三尺三寸の間にありて、斜面を以てすれば七尺五寸の地點より五尺五寸の幅を有せり、而して東側にては列石の痕跡を認むと雖も、散亂して配列の序正しからず、爲めに尺度を以て之を計るを得ざりき。

次で中央部の發掘を試みるに、其土壤は附近の古墳に於けること異なる所あかりしが、頂上より深さ約三尺三寸にして一本の直刀を發見し、更に其附近より他の直刀二本、刀子一本、鐵鎌二十一本、勾玉一個、管玉二個及び小玉十八個を略は二坪許の地盤に於て殆んど同一平面に存するを發見せしが、此等の遺物を發見せし周囲には棺槨の如き何等かの設備ありし形迹を認むることなく、更に面積を擴張して數尺を掘下げるも遺物の

發見あきのみならず上選また上層と異なる所あきを以て此處に其調査を終るに至れり。

最初に發見せし直刀は此塚の中心より二三尺許西側に偏在し、鋒端を北方と爲して刀背を東側に向けしが、其位置は正確ある南北を指すものにあらず。少しく東西に偏れるものあり、第二の直刀は前者の北方に在りて殆んど同一方向に存せしが、鋒端は却て南方を指し、刀背を西方に向け、兩直刀の鋒端一尺三寸は相交する位置に存せり、而して此兩直刀の並行部の兩側には各々約二寸五分を隔てゝ鐵鎌を發見せしが、西側あるは十八本にして鋒端を北にして、東側あるは三本にして鋒端を南にし、更に此地點より約四尺五寸の東方に於て第三の直刀存せしが、西北より東南の位置に横はりて、鋒端を西北と爲し刀背を西南側に向け、また此直刀の柄部より二尺許を隔てる東南の地點に於て、方一尺餘の間に勾玉、管玉、小玉及び一二の腐蝕せる小鐵片を得たりき。

直刀の第一は總長三尺一寸八分にして三個に折損せる狀態にて發見せしが、身幅は中央にて計るに一寸一分又背の厚さ二分五厘を有し、柄部は長さ六寸にして之れに有する一個の目釘孔は明白に之を認むるも、其位置稍々上部に偏するを見れば、尙ほ一個を有するものあるべけんも、腐蝕して其存否を確むるを得ず、第二は總長三尺二寸七分にして同じく三個に折損し、身幅は中央にて一寸四分、刀背の厚さ三分を有し、柄部の長さ六寸三分にして、二個の目釘孔には尙ほ鐵釘の附存するあり、第三は上部の一半を存するのみにして其下半部を發見するに至らず、從て全體を知るに由あきも、現存部の長さ八寸五分にして身幅九分、刀背の厚さ一分五厘、蓋し三者の内にて最も小あるものあり、此等の直刀はすべて不造にして本質の梢を有せし痕跡は僅に刀身に腐蝕せる殘骸に依りて之を認むるも、附屬の金具類は一も存するを見ず。

刀子は一本を出せしが断片に過ぎずして、現存部の長さ一寸四分、幅三分を有し、鐵鎌に混じて發見せられ、

鐵錐は總數二十一本の内、片刃形のもの二本、平根形のもの六本、他の十餘本は三角形のものに屬し、勾玉は草色に白色を交へたる不透明質の石製にして長さ一寸二分を有し、厚さ四分許、二個の管玉は共に水色を呈せる玻璃質にして、長さ六分餘、徑二分五厘、小玉は何れも玻璃質にして細小あるものありしが、紫色のもの二個と水色のもの十四個とは厚さ一分許にして徑一分五厘許、他の二個は淺黃色にして厚さ四厘許にして徑六厘程の微小あるものありき。

第二十號墳遺物發見の位置

(柴田常喜)



西都原古墳調査報告

〔大正五年一月〕

京都帝國大學文科大學教授文學博士 内藤虎次郎
京都帝國大學文科大學助教授 今西龍

一。 調査日誌

大正五年一月三日 本官等宮崎縣日吉紋次郎司馬託谷口草藏を同行し宮崎町を發し見瀬郡下野北村妻にある史蹟研究所に着し、調査すべき古墳の群集地西部原一圓を巡視して第二回古墳を發掘調査することに決定す。

同四日 地方考査會より選拔せる人夫十五人（より供給）を使役して第二號古墳の調査に着手す。内十人が後圓部に五人を前方部に用ひて前方部には方十二尺後圓部には方二十四尺の區割を作り討土を除去したりしに、前方部にては六尺の深さに達せし時、其北壁に砂礫を夾む關所に到達せし以て更に其の方面に掘り進みたり。後圓部は掘り下ぐるこ五尺、何等の異状を見ず。午後五時に至る。

同五日 人夫十六人を使役して前日の作業を繼續したり。前方部に於ては方十二尺を深さ六尺發掘せし外に更に北方に十字形に約壹坪深六尺乃至八尺發掘せしも何等遺物の痕跡を認めず。此部分には遺物の埋葬なりこそ推定し調査を終へ其の人夫を後圓部の調査に用ひ。後圓部に於ては中央部より稍東方（前方部に）偏して十二尺まで掘りしも遺物を發見せず。依りて調査リ廣めに北端に於て表面下約六尺に徑五寸乃至一尺の川石の半面を現出せしも以て此の方面に掘り進けしに六個の石より成る四尺二寸三二尺八寸の一石床なることを發見し、更に其の周圍を發掘調査せしに其の四方（右に）地下六尺餘の地點に幅十尺の長方形の石築物あるを發見し、人夫を督導して發掘を急ぎしも未だ其の全貌を知るに至らざりき。

同六日 調査の都合上昨日露出せし石築物を、前方より約五尺六寸の點より後方へ二丈だけ横断して其の構造を調査せるに上層の上に砂利を撒き砂を盛り之を被ふに粘土層を以てし更に大石を以て底盤せしものなることを知れり。即ち全部の發掘を急ぎ内部の調査に着手せしに、前方より十二尺の點よりはじめ十五尺五寸に亘る三尺五寸の區域に亘り多數の小玉環軒玉二個管玉数個を發見せり。此の玉類發見區域必発きたる地點にほか木片あり。注意して發掘せしに漢式鏡一面木片の間に鏡背を上にして送存せるが發見せり。

此間土床上の砂砾と其の上に墜落せし粘土礫との間にモガ管内にありしこれを推定さるゝ余一面に薄層をなして存せり。時に日暮れを以て調査を中止す。

同七日 石塋物後方部の發掘をなし其の全長二十六尺、内部砾石面の長二十三尺八寸なることを知れり。砾石面の前端より二十一尺九寸の點に刀子一本を發見し、更に二十二尺二寸の點に鐵製品の殘缺を得たり。調査せしに長一尺一寸三分あり、劍者くは刀の如きものなりしも酸化甚だしく原形判明せず。此の附近には數石と粘土層との間に土の堆積三つに及べり。砾石面の前後は中形の石を以て終點を區別せり。午前十一時調査を終了す。即ち研究所に運びて遺物を精査し粘土塊を水に溶かして小玉を採集す。又復舊工事を指揮して夜宮町に引上げたり。

二。 調 査 記

第一章 塚の位置と外形

第二號古墳は西都原臺地の東南、俗にハマンゴ池と稱する泉の上にあり。位置臺邊にあること第二十一號古墳（一本松塚）に似て妻町の平野を望み眺望頗る佳あり。

封土の形狀は前方後圓にして前方部を南にし塚の中心線は十度西に傾く。前後の長さ二百七十五尺後圓部の直徑百五十八尺頭部の幅七十六尺前方の幅九十八尺後圓部の高さ二十五尺六寸、頭部十四尺一寸、前方部は十五尺六寸あり。（第一圖參照）

古墳の位置臺地端に近く且つ少しく其の周邊より土をとりて此の塚の封土に加へたる形迹あるを以て塚の周圍は稍々低きも溝を形成せしものと認むること能はず、塚の左方（西方）と右方（東方、即ち臺地の端の方）とは基底に於て右方が左方よりも三尺五寸高し。

今上記塚の大きさを既に調査せし第十一號古墳（姫塚）及第二十一號古墳（一本松塚）と比較すれば左の如し。

全長	後圓部の徑	全長ノ後圓部 部裡ノ差	頭部	前方部	後圓部	頭部	前方部
姫 塚	一六〇	九〇	大	大	九〇	高	前方
一本松塚	二五〇	一六〇	大	大	一九〇	高	前方
第二號塚	二三〇	一六〇	大	大	一九〇	高	前方
	二元	一元	大	大	一九〇	高	前方
	二元	一元	大	大	一九〇	高	前方
	二元	一元	大	大	一九〇	高	前方
	二元	一元	大	大	一九〇	高	前方

此の表に就て見るに本古墳外見上の特色は前方部比較的の長くして且つ低く其の頭部と前方部が高さに於て大差なきにあり。一見有柄鏡に類似せり。即ち前方後圓式古墳に於て前方部の著しく退化若くは發達せざる形狀をこれることはあり。此の種の古墳を地方名柄鏡塚と稱す。第二圖は塚を西南の方向より撮影せるもの、以て其の状を見るべし。

古墳の現狀は翁樹を以て被ひたるも嘗ては喬松の生ひ立ちしこあるものゝ如く今猶ほ其の斷幹の株を遺せり。後圓部の頂上は平あり、現今散亂甚しくして原狀を見ること難きも古墳を葺くに礫石を以てせる形跡較著にして、今表土下約一尺に其の遺存せるを認む。但し後圓部の頂上には殆んど残存せず。其中央に稍大ある石（徑一尺五寸）三個の一處に遺存せるは嘗て此の塚の頂上に小祠の建てられしこありしかと認めたり。此の古墳と形狀を同じくし且つ隣接せる第三號古墳に於て大正二年鳥居龍藏氏調査の際後圓部の上方に經筒を埋めて經塚を營める事を發見せる例あり。塚の一部に後世小祠其他を營めるを知らる。

第二章 内 部 の 構 造

其一。前 方 部 の 調 査

此の塚は前述の如く其の前方部埴輪及一本松塚に比して著しく退化若くは發達せざるものあるを以て吾人は前方部に於ては何等遺物の存せざるべきを豫想せしが先づ十二間の城を深さ六尺乃至八尺まで穿ち調査せしに何等の遺物もく土壤にも變異を認めざりき。たゞ其の北端に於て砂礫を交ふる土壤ありしより更に此方面に十字形に約一坪の壙を作り深さ六尺乃至八尺に達せしも是れ亦何等の発見あかりしを以て此の部分には埋藏せしこと無きものと認定せり。

其二。後圓部の構造

後圓部に於ては南北の中央線(此の中央線は正南より十度西に偏せり)より西に偏して此の線と四十四度の角度をあして東南より西北に亘り塚を發見せり(第一圖参照)初め徑一尺計りの石數個を封土中に認めて之に沿ひて發掘せしに此等の石を用ひて構成せる高三尺五寸、長二十六尺、底部の幅九尺乃至十尺の伏筒形の石築物を露出するに至れるにて是れ本古墳の主體あり。之を檢せしに此の石築物の頂部は縱に長く窪み居りしを以て其の内部に棺槨を容れしものと推知しむる。其の上部に當る部分の墜落せしものなるを推知したり。依つて其の前の端(東南端即ち塚の前方部に當る方向)より五尺六寸の點より約二尺を横載し其の内部を檢せしに第四圖の横断面圖の如く土床の上に砂利を敷き恐くば木棺に收めて遺跡遺物を安置し粘土を以て之を包被し更に其の外部を第五、第六兩圖に示すが如き二重若くは三重に石を置きて之を擁包せしものあることを知れり。今調査の結果に依り其の構造の順序及形狀を按するに如左。

- (一) 土壇の作成
平地より頂上表面に至るまで高約二十六尺(現状にして、土壤他に移去の形迹あり)の後圓部の中央より右に

傾したる部分に於て表土下其の前方に於ては約十尺六寸後方に於ては八尺七寸の傾斜せる一平面を作り、此面上に長さ二十五尺乃至二十六尺下幅約七尺上幅約四尺、高約一尺二寸の土壇を設く（第七圖参照）是れは其の前方（東南塙の前方部に向ふ）と後方と高さに於て後者が前者より約二尺高く、また北より西に三十度傾きたる方向に作たり。

(二) 土壇面に礫石を葺くこと。

次に此の土壇の表面に徑一寸乃至二寸の礫石を整列密植したる長二十三尺八寸幅一尺五寸の面を作り、表面の殘部と四周の側面には四寸乃至五寸徑の川石を以て葺き其の崩壊を備防す。（第四圖参照）

(三) 棺を置くこと。

次に此の小礫石面に高一尺内外の長方形ある棺を安置し其の四周の下半を四寸乃至五寸の石を列して之を蔽掩す。

(四) 粘土糊を作ること。

既に石を以て葺きたる土壇及その上に安置せられたる棺を併せて厚さ三寸乃至九寸許りに粘土を以て四側及上部を包掩して粘土のナマコ形のものを作る。

(五) 堆石を以て蔽掩す。

次に此の粘土糊を一尺内外の河石を以て二重乃至三重に蔽掩して糊の構造を完成す。（第三、四、五、六圖参照）

(六) 堆石外の築造物

此の堆石の向つて右に沿ひ其の前方より十六尺と十九尺の間に當り（墳の後圓部の中心より較々後部にあるやの感あり）墳の表面よ約り七尺五寸の位置を其の上面とし數個の石を列して横四尺二寸縦二尺八寸の構造

物を作れり(第八圖参照)其の上下及四圍に於て何等の遺物を發見する所なかりき。

(七) 封土を加ふ。

上記石堆上に封土を加へ礫石を葺けり。

其三。 棺及遺物の配列に就て

棺は腐朽して形迹あく埋葬の遺骸また骨片をも止めず。従つて棺の如き其の構造の詳細を知る能はざるもの之を棺坐と思惟せらるゝ礫面に依りて推定するに恐くは本製にして長さ二十三尺餘幅一尺五寸高さ一尺内外の長方形のものありしが如し。而して棺内には全部に亘りて薄く朱の配布されありしことは礫面上に遺存したる遺物と礫石面が全部朱を以て厚く染まり居るにて知るべし。内部に於ける遺物の配列は第十圖に示すが如く棺の前端より約十二尺乃至十五尺五寸の間に多數の玻璃製小玉硬玉製勾玉、出雲石製管玉あり十五尺九寸の位置を中心として一面の漢式鏡が背面を上にして木片に挟まれて存し、十七尺より二十三尺に至る五六尺の間には有機物の土化せるらしきものを發見せるに依れば、此の間には何等か有機質のもの載せられしある可く、二十一尺二十二尺間の地點に長一尺一寸三分の鐵の劍の如き鉛損物あり其先に一口の刀子を置けり。

第三章 発見の遺物

上述の如き配置にて發見せられたる本古墳の副葬品を列舉すれば次の如し。

一、銅鏡
二、木片
三、勾玉

壹
二
個

四、管玉

四十餘個
百數十個

五、小玉

一 口

六、鐵刀子

一 片

七、鐵劍殘缺

八、朱

今其の主要あるものに就て其の形狀様式を記して本古墳の年代及性質研究の資に供せんとする。

(一) 銅鏡

徑七寸二分五厘綠高二分三厘、重量二百四十五匁あり。鏡面に一分の反を有す。今青銅色を呈せり。鏡背の文様は第十一圖の寫真に示すが如く、大なる鉢を繰りて内區六個の素乳の間に粗線式の三神三獸を交互に配し鉢齒紋帶に次げる一區には十素乳の間に雙魚飛禽、獸形、虫魚等の一種の獸帶を現す。之より櫛齒紋、櫛齒紋、複線波紋、錫齒紋の四帶を置きて緑とあれり。此の文様に就きて其の様式を窺ふに神獸の形式は魏晉の式を傳へたるものと認むべきが、こゝに注意すべきは其の内區を繰りて存する獸帶にして、表はせる所はまさに古く、ばびろんに盛行せるZodiac あるにあり。西域との交通開けて此の特殊の文様を魏晉の鏡背に見ることは頗る興味を惹く事實あり。

此の種の鏡は山城國葛野野川岡村、大和國北葛城郡河合村佐味田賣塚、尾張國東春日井郡不二村、丹波國氷上郡石生村、讃岐國香川郡弦打村、肥前國東松浦郡谷中村等廣く本邦各地の古墳より出土するものあり。中に就て第十三圖の尾張國不二村發見の一面は最も精巧あるものに屬し、支那より將來せるものたるを思はしむるも、本古墳發見の此の鏡は第十四圖に示す富岡譲藏氏所藏の鏡（出所不詳あるも恐らく大和、河内の古墳

より出土せるものなるべし）と共に文様に生氣を缺き製作粗雑である所あるのみならず、鏡背の一部分に型の破損を接合せりと思はるゝ線の現れたるあり。是等より推せば恐らく上舉の不二村出土の如き支那將來品に依りて古く我が鏡作部にて製作したものあるべし。

（二）木 片

上述の鏡の上下に存したるあり。其の一は長七寸七分、幅三寸、厚一寸二分あり。鏡の上部にありしものにて其の一面に鉢、乳等の接したる凹所を存す。二は之よりも小さく長さは最も大なる部分にて五寸九分、幅は二寸厚二分乃至五分あり、前者が直の平面あるに反し稍内側に彎曲せるを見る（第十五圖参照）。發掘に際し此の木片と鏡との間に朱の附着するものありしより推せば是れ必ず鏡匣ありしあらんか。但し鏡匣としては蓋に當る部分の厚さ稍々大に失するやの感あり。木質は榆材あるが如し。

（三）勾 玉

第十六圖の寫真に示すが如し。二個共に綠色透明の硬玉製にして俗に翡翠と稱し、古墳に於ても比較的出土少しき優秀品なり。大なるは長一寸三分五厘あり。頭部に五條の切り目を有し、表面分解して一部分稍白色を呈す。他は長一寸一分にしてこれ亦同じく頭部に三條の刻線あり、俗に丁子形と云ふ種類に屬せり。

（四）管 玉

其の數四十餘個あり。何れも碧玉即ち出雲石製にして、小形あり。最も大形のものにて長四分徑一分五厘を出です。小あるは長一分徑一分に満たず。穴は何れも巧に中央線を真直に貫通せり。此の種の管玉は其の製作普通の大形品に比して困難あれば、高貴ある墳墓に發見せらるゝを常とす。

（五）小 玉

硝子製のみにて他の種類の玉を混ぜず。色は淡青色を呈し美麗あり。此の玻璃玉は土器類の全く存せざりし本古墳に於ては鐵と共に墳墓營造の年代を推定する單據の一となるるものあり。

(六) 刀子

鐵製にして破碎せるが接合して長二寸八分の一口を得べし。普通に見る形式あり。

第四章 第二號古墳の性質

第二號古墳は既に調査せる第十一號古墳第二十一號古墳と比較する時は研究上頗る有益の資料たるものなり其の封土の外形及び位置より説けば第二十一號墳は第二號墳と第十一號墳との間にありて著しく第二號墳に一類似するものあるが、其の内部の構造に於ても亦此の關係を保てり。其の外形のことは前章既に比較表を以て示したれば今内部の構造に就て述べんに、後圓部に粘土櫛の存在せし事は第二號墳第二十一號墳と殆ど同じして特に注意すべきは兩墳共に其の櫛の上方の封土内に數個の川石を以て構成せる意義不明の一小石築物の存在せしことはれあり。第二十一號墳には粘土櫛を擁護する堆石あかりしこと雖其の前方部には別に方形の粘土櫛あり其の上方に形式的に列石面を作りて之を擁護するの形をなし、之が陪塚と認むべき第二十五號墳にも棺檻の上方を列石の以て擁護せしものありしも、第十一號墳に至りては全然之を有せざりき。

第二號墳には後圓部に一櫛の存在するのみなりしに第二十一號墳は粘土櫛の外に其の上方に別に礫石を以て構成せる構造あり。第二號墳の前方部には何等遺物の存在することなく墓壙の存在せしことも認むる能はざりしこと雖第二十一號墳には明に前方部にも埋葬せし跡あり。第十一號墳には埋葬の事實は不明あれど遺物存在せり。但し此前方部に埋葬するこせざるとは其の墓主の親族關係者の有無或は埋葬時の事情によりて異

同あるべきを以て古墳の研究上重きを置くに足らざるものある可し。

第十一號墳には全く粘土櫛を有せざることは第二號及第二十一號兩墳と重大ある相違として考へざるべからず。其の遺物に至りても三墳の間には著しき相違あり。第十一號墳には數多の土器と鐵劍鐵鎌等及勾玉管玉小玉を遺存し、第二十一號墳は櫛外に唯一個の土器と櫛内に鐵及劍とを存在し第二號墳に至りては上述の如く第十一號墳のものとは比較すべからざるまで優秀ある勾玉管玉及小玉と鐵其他貧弱ある劍片、刀子とを埋藏し土器に至りては一個をも存在せざりしより。之を三墳の間に進化の順序ありとするも考古學今日の進歩の程度に於て遺物によりて其の築造の前後を判する事容易あらざるが故、主として櫛の構造に依らんか、先づ第十一號墳より第二十一號古墳の如きものに進み更に第二號墳に發達し尚進みては堆石に代ふる石室を構造するに至るものとも解し得べく、或は之と反對に第二號墳の如く堆石を以て櫛を擁護するものより第二十一號墳の如く其の堆石を缺ぎ若くは形式的にのみ之を列するに止まるに至り、更に進で第十一號古墳の如く全く堆石を缺ぐのみあらず粘土櫛をも缺くに至れるものとも解することを得べし。此の場合に於ては第二號墳は新羅上代古墳の如く棺槨の周圍に數多の堆石を有するものよりして發達せしものと解すべく或は石室を有するものゝ略式もありしものとも解することを得べし。若し第十一號墳の如きものより石室を有せるものに移りしこすれば是れ進化にあらずして他の原因より來りし其の間に連絡あき變化ありどあさるべからず。然り而して前記三墳の間に進化の關係ありとするも或は一地方にのみ起りたることあるやも計られざるを以てこの事實を用ひて直ちに日本全體の古墳を律せんとするは不可あり。但し之を廣く日本諸地方朝鮮半島の例によりて見るに石室を有する古墳の後代に築造されたるもの多きは事實ありと雖、かゝる風習は一たび廢絶せしものゝ自然に復興し、或は外來の影響に依り更に廢絶したるものと同一の風習を新興することあり。又

種々の事情に依りて時處の異同に論あく構造を異にすることもありたるあるべし。茲に至りては異同を律するに時代の相異を以てすべからず。單に進化を以て説明すべからざるものありとす。考古學は或る意味に於て過去の土俗學 Ethnography あり。而して此の意味に於ては之を記述することを得べし。之を論斷せんさせば一事實に伴ふ他の事實をも廣く考察せる上あらざるべからず。此の事は考古學現今の進歩の程度に於ては未だ困難あり。従つて本古墳の性質の如きも今日に於て正確に之を知らんことは不可能ありと云はざるべからず。

大正七年三月三十日印刷

宮崎縣內務部

印刷者 吉井富雄

印刷所 細流舍支店

宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上別府三四四六番地
宮崎縣宮崎郡宮崎町大字上別府三四四六番地

